

そして誰もが帰ってくる
Heart of the
warship girls

柳之助

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海は並べてこともなく。

深海の亡者は夢を見て。

たった一つの犯した過ちは消えず。

砂浜の長い午後は過ぎていき。

海の命は全て光となつて。

そして誰もが帰ってくる。

pixivでも同時投稿しています。

目次

e
w
a
r
s
h
i
p
g
i
r
l
s

そして誰もが帰ってくる Heart

やつと大鳳は疲れを取る
それでも武蔵は受け入れる

103

of the warship girls
is

なぜか木曾は笑われる

126

そしてヴェールヌイは訪れる 1

けれど北上は笑い飛ばす 15

まさしく榛名は天使である 29

やはり瑞鶴は運がいい 40

なんと加賀はノリがいい 51

つまり不知火は落ち度がない 62

そして誰もが帰ってくる 74

こうして提督は決意する 87

海の光は全て命 Life of the

126 114 103

そして誰もが帰ってくる Heart of the

warship girls

そしてヴェールヌイは訪れる

みやーみやーとうみねこは鳴き、ぷかぷかと海面を浮きが漂っている。

それほど強くない波と潮風に揺られ続けて早一時間。浮きも釣り糸も微動だにすることはなく、そしてそれについてなにかをするわけでもなく僕はただ海を眺めていた。

港の中でも一際長く飛び出た波止場の端っこ。ストラックスと袖をまくったカッターシャツという軽装で半分眠りながら釣り糸を垂らす。ルアーやリールが付いたような本格的なものではなく棒きれに糸を付けただけの簡易版の釣竿だ。

「くあ……」

釣れないなと思いつながらあくびをかみしめる。天気はいい。春真つ盛りの四月と昼下がりなのも相まってぼんやり釣りをするには持って来いだ。一時間近く呆けていても苦にならない。時折頭についた海軍帽を弄つたり、持ち運び用の折り畳み椅子で胡坐をかきながら海を眺めつづける。

「ふむ……暇だねどうも」

「だったら仕事に戻ってきてください」

「おや」

背後から聞こえてきた声に振り返る。

桃色の髪の少女だ。黒のベストに半袖のブラウス、両手には白い手袋。こんなにもいい天気だというのに表情はない。

「不知火ちゃんか、どうしたんだい？」

「貴方がいつの間にか執務室から消えていたので探しに来ました」

「そりや苦労かけたね」

「いえ、ここだと想像できたので真っ直ぐに来ましたら労力としてはそれほどでも」

「わあい以心伝心」

「……」

反応がなかった。

悲しいけれどもいつもの事なので苦笑し、視線を海に戻す。

相も変わらず浮きは動かない。

「それで、えつとなんだけ？ 不知火ちゃんも一緒に釣りをしたいって？」

「違います」

「連れないね。……あ、こつちも釣れないけど別にギャグってわけじゃないよ?」

「ギャグだったら海に突き落としてました」

「こわいなー」

怖い怖いと眩きながら、なんとなく竿を揺らした。まあだから動きがあるというわけでもない。

「仕事ね。他の皆はどうしてる?」

「特に何も。皆さん暇を持って余してますから。それぞれいつも通りです」

「それは僕の責任じゃないな。仕事を回してこない上が悪い」

「解っているから誰も貴方に文句言うことはないんです」

「……まあ確かに文句とか言わなさそうだ」

自分の仲間の少女女性たちを思い浮かべれば、反応だつて解りやすい。短い付き合いでもないので。一番長い付き合いの不知火ちゃんも頷いて、

「だから今すぐ戻つて雑務の類を行ってください」

「あれ? ここはやることないから皆で適当にぼんやり釣りをしようつて話じゃないのかな?」

「違います。貴方には貴方の仕事があります。それほど量はないのですから手早く終わらせるべきだと思いますが」

「だとしても、加賀さんや君がやったほうが速いと思うけどねえ」

「その場合は不知火たちが貴方の腕を斬り落とす必要がありますか？ 行いますか」

「遠慮しておこう」

「不知火としてもそのほうが嬉しいです」

僕は肩を竦め、不知火ちゃんは無表情で頷いた。海で静かに揺れる浮きには変化の気配はない。ついでに言えば黙ったら黙ったて後ろから不知火ちゃんの視線が注がれてくる。慣れているし、受けていて苦痛というわけでもない。正直もう数時間これでもいいかなあとも思った。

「うーん。ねえ不知火ちゃん」

「なんでしようか」

「雑務って今すぐやらないといけない系？」

「やらなければ上から支給される資材が滞るか配置される艦娘が来なくなるのがよろしければ放っておいてもいいかと思われませう。それに」

「それに？」

「もうすぐ今日付けで配属される艦娘の子が来訪しますが？」

「……ああ、そういえば今日だったか。ふむ。仕方ない、戻ろうか」

釣り糸を引き上げ、

「ありや」

「どうかしましたか？」

「餌がないや」



「それで？ 新しく来るのはどんな娘かな？」

執務室に戻る間に不知火ちゃんに話を聞く。新しい艦娘が来るとは聞いていたがどんな子が来るのかはまだ聞いていなかった。執務室に戻れば詳しいことが書かれた書類があるのだろうが不知火ちゃんに聞いた方が速い。

「暁型駆逐艦二番艦ヴェールヌイ。横須賀鎮守府から移転です」

「人気艦だねえ。どういう経緯かな」

「質問に僕の右後ろから説明する。」

「練度^{レベル}は七十三。三か月前に改造され『響』から『ヴェールヌイ』になられたそうです。横須賀鎮守府にて同型駆逐艦『暁』、『雷』、『電』とも共に第一艦隊として活躍していた

そうです。撃墜数はかなりもので改造前からも夜戦に於いて戦艦や空母も幾つも沈めていきます。ですが……」

「ですが？」

「……三か月前から一切成果を上げていません。出撃しても交戦できず、回避行動のみをしていたそうですね。そのせいでここに送られることになったようですね」

「……ふうん、なるほどね」

まあここに来る時点で色々あるのは予想できる。

そもそも位置的にこの鎮守府は制作意図が意味不明なくらい酷い。日本本土な有名な鎮守府である横須賀と沖合にある八丈島の間の無人島に少し手を入れただけ。日本各地や海外の鎮守府の中でも整備に関しては最悪だ。着任している提督も僕だけ。横須賀や佐世保、呉ならば二桁の提督がいるという酷い差である。

「そういうえば横須賀といえは加賀さんと同じじやなかったけ？」

「聞いたところによると加賀さんが此処に来た後に建造されたようで。特に話は聞けませんでした」

「それは残念。まあ仕方ない、大体わかったよ。それでその娘はいつ来るのかな？」

執務室の前にまでたどり着き、そう聞きながらノブに手を取る。これから先長い付き合いになるのかもしれないだし、ちゃんと歓迎してあげたい。まだ島に到着していな

いならば出迎えたい所だ。

そう思ったのだが、

「もう執務室で待つてます」

「なんと」

開けた扉の先に彼女はいた。



執務室は極めて簡素だ。家具コインで取引できる家具の類はほとんどなく、基本仕様のまま。それでも掃除は隅々にまで行き届いている。勿論これは僕ではなく不知火ちゃんによるものだ。執務机の上にはいくつかの書類があるが纏められて僕が判子や署名をするだけなのだろう。

そんな部屋の真ん中、執務机の前に彼女はいた。

「……」

銀色の長髪に白がメインのセーラー服、同色の帽子。身長はかなり小柄だ。不知火

ちゃんよりもさらに小さいだろう。扉を開け、僕と不知火ちゃんが部屋に入ったと同時に彼女が振り返る。髪と同じ、銀の瞳と目があった。

人形みたいな娘だ。

表情というのが見えない。

『響』や『ヴェールヌイ』はそういうキャラクターの艦娘であるが、それにしたつて度が過ぎてしまうようにも感じられた。それでもそんなことはおくびにも出さず顔には笑みを張り付けたままに話しかける。

「やあ、君がヴェールヌイちゃんだね。僕がこの鎮守府の提督だよ。よろしくね」

「……よろしくお願ひします」

「ああ、敬語はいいよ。普段通りにね」

「……了解した^{ダー}」

元気がない。だがそんなことはいいい。上着を不知火ちゃんに渡して、ヴェールヌイちゃんの横を通り自分の椅子に座る。不知火ちゃんも入口にある衣装たちに上着を掛けてから、僕の後ろに立つ。

「さてと。ようこそこの鎮守府へ。正式名称とかなんか長くて意味不明で誰も使っていないから適当に。今言ったけど僕が君を指揮し、担当するこの唯一の提督ね。後ろの彼女は僕の秘書官でうちの艦隊の旗艦を務める不知火ちゃん。仲良くしてあげてね」

「秘書艦の不知火です。以後よろしくお願いします。私は司令の補佐が基本で、貴女が慣れるまでの補佐は北上さんに任せるつもりだったのですが……まあすぐに会えるでしょう」

「北上……?」

名前に僅かにだがヴェールヌイちゃんが眉を潜めた。

「ええ。知りませんか?」

「いや、知っているけれど……」

「ははは、基本的にルーズだけど悪い子じゃないから赦してあげてね? できれば仲良くも」

「……了解^{ダイ}。相性は悪くないはずだ」

「……いいけどね。それじゃあ、こここの鎮守府についての説明ね。不知火ちゃんよろしく」

「自分でなさらないのですか?」

「だって僕がやるといつも真面目にやれとか途中から不知火ちゃんがやるじゃない。なら最初からね」

「……はあ」

僕の言葉に不知火ちゃんをこれ見よがしに大きなため息をついてから、

「説明しましょう、と言つても特に細かいことはないのですが。起床時間や就寝時間は自由です。ただ艦娘は大部屋を全員で使っていますので他人の迷惑にならないように。それでも皆さん八時、十二時半、七時には食事を取っています。合わせる気がないなら自作してください。演習場も常時開放していますので、使いたい時は好きにどうぞ。ただし使用した弾丸や燃料は先でも後でもいから報告を。ドッグの使用は……娯楽目的なら特に報告は必要ありません。此方もお好きにどうぞ。補修時は補修必要者同士での相談が基本ですが司令からの指示が優先されます。これはほとんど適用されませんが……まあこの程度ですね。これ以外に聞きたいことがあれば質問をどうぞ」

一息に必要なことのみでの説明だった。伝わったか心配だけれど、案の定ヴェールヌイちゃんは眉を顰めた。

「……それだけかい?」

とか思つたら理解していて質問をり返していたよ。

「ええ。これらを守ってくれば問題はありません。破つたからって何かあるわけではないですが」

「……随分と緩いようだね」

「まあ厳しくするのも面倒だしね。ぶつちやけ今不知火ちゃんが言ったのも生活してたら勝手にできあがつたホームルームみたいなのだし」

「……気を付けるよ。それで、私からもいくつか質問いいかな」
「どうぞどうぞ」

「来るとき他の艦娘も全く見なかったし人の気配もなかったんだけど、何か大規模な案件でもあったのかな？ そうだとしたら悪いときに来てしまったようだけれど」

「ああ、それか」

確かにそう思うのは仕方ない。これまで初めてここに来た皆も同じようなことを言っていたし。実際気になるところだろう。普通どこの鎮守府行っても大体駆逐艦の子で賑やかだし。

「それは仕方ないよ。この鎮守府には、この島には六人しかないからね」

「……………はあ？」

初めてヴェールヌイちゃん表情が崩れた。銀色の眼が見開かれる。

「だから、此処にいるのは六人、君を含めても七人だ。僕、君、不知火ちゃん、榛名ちゃん、加賀さん、瑞鶴ちゃん、北上様ちゃん。これだけだからね。そりや人気もないよ」

「……………それだけ、だって」

「そう、それだけ。君が来てくれてようやく六人揃ったよ。やったね、第一艦隊埋まったよ」

「……………」

あからさまに絶句していた。

まあ確かに艦娘が六人なんて鎮守府はよっぽどない。着任してすぐの提督が初期艦と数人だけというのはあつても他の提督とフォローし合うのが普通だし、一年もやっていれば四艦隊の指揮権と数十人の艦娘がいるのは基本だ。横須賀から来たというのなら猶更驚くだろう。

「じゃ、じゃあ出撃や遠征はどうしてたんだい……？」

「基本ないね」

「——ない？」

「ないよ。だってこんな場所だからさ、攻めてくる連中は八丈島にローテで滞在してる提督さんが対処するし、それ突破しても横須賀がさっさと出撃するしねえ。平和なもんだよ。この前出撃命令がでたのは……いつだったけ」

「二か月前ですね。駆逐艦一隻だけでした」

「そうだったそうだった。まあ、そんな感じさ。遠征もこんな人数だからする余裕はない。演習も僕たちみたいのとする必要もない。たまーに出撃帰りで艦隊全員が大破して緊急入渠くらいかな。これは一回とか二回とかしないけど。そんなわけなのでそういうことの心配をする必要がないよ」

「っ心配なんて……いや、そうか。当たり前だけど私のことは聞いていたか」

一瞬だけ表情を変えたが、すぐに勢いを無くし自嘲する。

「まあね。戦えないんだって?」

「そう。私はもう戦えない。前の提督は練度レベルが高く、改二艦だからと解体や改修の材料にされることもなくて、こんな所に来たんだ」

彼女の練度レベルは七十三。確かに回収や解体するには惜しい。艦娘には学習機能があり、戦えば戦うほどその実力を上げていく。出撃演習遠征のどれかで経験を積むことによつて得た成長の証を数値に現したのが練度レベルというものだ。あくまでも目安なので偶にあてにならないかつたりするが解りやすいので大体の提督は艦娘の能力をこれで図っている。七十三ともなればかなり高い。

「悪いけれど第一艦隊は埋まらないね。どうするんだい? 解体も改修も好きにして欲しい。出撃しろと言われれば出るだけ出るから棄て艦にしてもいいさ。提督の好きにしてくれ」

「と、言われてもね。言つた通りこの鎮守府は鎮守府として働いていないから解体とか改修も必要ないんだよ。仕事なんて最低限の資材申請、それに君のような問題児を受け入れるだけだ」

「……ならばどうしろと」

「好きにすればいいよ? とりあえずさつき言つたことを守つて皆と仲良くしてくれ」

ば。これから先は生活を共にするわけだしね。強制するつもりはない、僕だって大体はここで本読んでるか島のどこかで釣り糸垂らしてるからだから」

「仕事をしてください」

「あと不知火ちゃんに怒られるかだね！」

「殴りますよ」

「殴ってから言わないで……」

地味に痛いのだ。

「……」

コント染みた光景だったがしかしヴェールヌイちゃんは完全に無反応、というか呆然としていた。無理もない。こんな鎮守府なんてどこにもないし、これで鎮守府とか言ってたら他の所に失礼だ。本当にお上はなぜこんな所に作ろうと思ったのか。

「何はともあれ」

笑顔を張り付けて、呆けたままのヴェールヌイちゃんに言う。

「人類の為に戦おうとか全く考えていないけれど、よろしくね」

けれど北上は笑い飛ばす

艦娘とは前提として兵器である。

確かに艦娘とは外見上は見目麗しい少女や女性たちだ。それぞれの性格や容姿に差異はあれどもある程度整っていることには変わりないし、コミュニケーションを取るのも人間と同じようにできる。戦闘行為には燃料のような各資材が必要になるが日常生活のみならばそれほど必要はないし人間と同じものを食べればそれでいい。ごく普通に娯楽を好むこともあるし、艦娘によつては出撃の合間に居酒屋を始めるような艦もいる。練度の高く、功績の大きい提督の艦娘はメディアにも登場しお茶の間に顔を広げるようなことだつてしている。各地の鎮守府に行けばそれぞれ年相応の少女や女性たちが遊んだり、笑い合っているような光景を幾らでも見れるし、心洗われる光景だろう。

だとしても。

兵器であることには変わりない。

深海棲艦。それが人類の天敵であり、艦娘が倒すべき相手だ。詳しいことは全く分かっていない。強ければ強いほど人型を取る。定期的に海に出現する。季節の変わり目には大量発生することがある。ものよつては人語を解す。その正体は一切謎。色々

仮説はあるそうだが、現実問題としてあげるべきはこの程度だろう。六十年前程にいきなり海から現れた彼女たちに対し、当初人類は全く対抗する手段がなかった。

あわや人類滅亡の可能性があるかもしれないとなったが故に誕生したのが——艦娘だ。

異世界に存在した海の力、つまりは巨大な鉄の身体を持ち炎の剣を持った軍艦の魂を呼び出し、少女の形を取ったのが艦娘なのだ。訳が分からない。百歩譲って異世界から軍艦の魂を呼び出すというのはいい。ツクモ神は日本ではよくあるし、非生物に魂が宿ると言うのは世界的に見ても珍しいことではないそうだ。けれどどうして年頃の少女に姿を得るのか。一切少年や男性は確認されていない。このシステムを生み出した者は謎に包まれているが何を思っこんなシステムを生み出したことこそが謎である。

いずれにしても艦娘はどうしたって兵器なのだ。深海凄艦を打倒するために人間が生み出した最終兵器。それが軍艦の少女たち。

日常生活を効率よく、スムーズに性キョウクター格や個パーソナリテイ性はある。それでも彼女たちはそれを忘れない。そもそも忘れる忘れないという話ではないのだ。

人が息を吸うように。

魚が水の中を泳ぐように。

鳥が空を飛ぶように。

艦娘は深海凄艦を轟沈させる兵器である。

本能レベルでそういう風に認識しているのだ。

故に全ての艦娘は思う。

そうであるべきだと。

そうでなければならぬと。

思っている。

思つて——いた。



「……あ」

瞼を刺激する光によつて意識が浮上した。微睡みの中でゆつくりと目を開ける。輪郭の定まらない視界の中に日光らしき光が突き刺さり思わず呻き声を上げながら体を横に向ける。それによつて光は視界からなくなり随分と楽になる。

「っ！」

身体を包む感覚が見知らぬ物であることに気付いて飛び起きた。緩んでいた意識は一瞬で覚醒し、周囲に対しての警戒度を跳ね上げる。起きたら全然知らない場所だったなんて冗談じゃない。そして視界に映るのは、

「……………」

六人用の大部屋だった。

そうして私はようやく気付く。覚えのない寝床なのは当然だ。自分が生まれてからずっと使っていた横須賀鎮守府の私室ではない。昨日から配属された無人島まがいの鎮守府の共用部屋だったのだ。

広い部屋だ。

長方形の大部屋は六人が雑魚寝してもそれぞれのスペースを確保できている。普通これだけの人数ならば二段ベットでスペースの工夫をするようにしているがここでは全くそんなことはなかった。昨夜はそれぞれの自己紹介もそこに歓迎会という名の宴会に夜遅くまで巻き込まれてから、皆で一気に布団を敷いて寝だしたのには驚いた。私も色々衝撃がありすぎてそのまま眠ってしまったが、冷静になれば酷い展開だ。

周囲を見回せば未だに眠っている同僚たちがいる。

自分の右隣にタンクトップにハーフパンツという男の子みたいな恰好の『北上』。左隣には女の子らしい黄色いパジャマの『榛名』。真上と右斜め上に『加賀』と『瑞鶴』が

寄り添い合うように一緒に眠っていて、

「おや、おはようございます」

既に不知火が艦娘の制服に着替えていた。手袋の嵌りが悪いのか拳を開いたり握ったりを繰り返しながら彼女は声をかけてきた。

「速いですね。まだ七時前ですよ。朝食は八時ですが、自分で作るつもりですか？」

「あ、いや……単に目が覚めてしまっただけだよ。不知火こそ早いね」

「不知火は司令を起こさなければならぬので。朝が弱いんですよあの人は。意識を覚醒させるだけで三十分は掛かって、起き上がるのもう三十分掛かります。その間に朝食を作るのですが。ヴェールヌイさんはどうしますか？」

「えっと、貰えるなら一緒にいいかい？」

「勿論。六人も七人もそう変わりませんし、作るのは不知火だけではないですから。榛名さんや加賀さんが手伝ってくれることが多いですし」

「……」

なんとというか艦娘自身が料理を、というのは違和感がある。確かに料理が趣味、或は上手という艦娘はいる。『鳳翔』は有名だし、『木曾』も実はできる方だ。それでも基本的にどんな鎮守府でも補給艦の『間宮』がいるので三食を艦娘自身が作るということはない。

それでもこの島ではこれが普通なのだ。

何せ人口七人の無人島もどき。

鎮守府になってないと声を大にして叫びたいが、しかし提督本人が言っているのだから酷い話だ。

「私はこれで行きますが……恐らく北上さんも簡単に起きないから起こして上げてくださいね。昨日も言いましたが彼女が貴女の案内役なので。ああ、食事に向かう前に軽く鎮守府内を回つてもいいんじゃないですか？ それほど広くないから、少しくらい朝食に送れても問題ないので」

「りようか……ん？ あれ、案内役……？」

「では」

「あつ」

何やら意味と現実にはズレを感じて戸惑っていたらその間に不知火は部屋を出ていた。吃驚するくらい要領がいい。『不知火』ってあんなキャラクターだったのかと頭を悩ませつつ、

「……」

「くかー」

涎を垂らしたまま大口を開けて寝ている案内役とやらを眺めて、

「……はあ」

どうしてか大きなため息を吐いてしまった。



「やあーやあー悪かったねー、ヴェルっちー。ぬいっちに蹴り起こされる毎日だからあんな風に優しく起こされると中々起きれなくてさー。明日からは頑張るよー」

「はあ……」

北上を起こすのは本当に大変だった。声をかけても揺り動かして全く起きない。他の艦娘たちも慣れていいのかほとんど反応はなく食堂へと向かってしまった。正直私も放っておいて食堂に行きたかったが、そもそも食堂の位置なんて知らないし、そのままにしておくのもどうかと思ったので頑張ったら彼女が起きたのが七時五十五分だった。私は既に着替えていたけれど、彼女の方は寝間着のままの恰好だった。一応建物からでて、外にでるのだ。それでいいのかと突っ込んだが、

「いいよいいよー。どうせ見せて困るような相手もないしねー。えっと、それでぬ

「いっちが案内しろだってー？ そっかそっかーまあじゃあ行こうかなー」

そのまま港へと碌に舗装されていない土の道を進んでいく。左右はそれなりに深い森だが、見上げられる空は高い。

「い、いいのかい？ 八時から朝食なんだろう、思い切り過ぎてるけど」

「だいじょーぶだいじょーぶ。別に強制じゃないし。んじゃ行こうか、無人島鎮守府ツアー。まあー見る所とか演習場とか艦装置き場くらいだけどね見ておくべきところは。ヴェルつち、トイレとかお風呂に提督の部屋は解るよね？」

「一応。というかそのヴェルつちっていうのは……？」

「だってそうじゃないとぬいっちと被るからねー。ヴェルつちだよ。もしかして嫌？」

「嫌ではないけれど……」

しかしそれにしただって謎だ。

球磨型三番艦重雷装巡洋艦『北上・改二』。

『甲標的・甲』と呼ばれる特殊潜航艇を積むことによつて所謂開幕雷撃が可能な雷巡であり、魚雷を四十門を積んでいて、誰か呼んだがついたあだ名がハイパー北上様。性格は大体のんびり屋。姉妹艦である『大井』と仲がいいが『阿武隈』とは仲が悪い。駆逐艦を嫌いと言いつつも面倒見はよし。

そんな風な感じだが、それでも駆逐艦に対して普通にあだ名を付けるなんて話聞いた

ことない。

そんなことを思いつつ、けれど北上は気づかずに腕を頭の後ろで足を進めていく。

「ま、ぶつちやけ演習場と艀装置場も一緒だし、補給場所もすぐ近くだから夜だけですぐ終わるからな。それだけど面白みもないし……そうだねヴェルっち。一応この先輩として一つ忠告しておこうかな」

「忠告……?」

いきなりの言葉だったが、まあ別に珍しいことでもないのかなと思う。食事の時間帯だつてローカルルールらしいし、昨日の聞き洩らしがあつてもおかしくないだろう。そういうのは早めに聞いておきたい。別に無理に輪を乱すつもりはないのだ。

「ま、簡単だよ。まず一つ、お互いについて必要以上の詮索しない。……これについては色々言う必要ないよね? 言いたくないし聞きたくないでしょ?」

「……解つてるよ」

「んじゃ二つ目、こっちは結構切実で——提督にちよつかいかけちゃだめだよ?」

「……………は?」

ちよつかい……ちよつかい……?」

「それは、つまり……?」

色恋事のことだろうか。提督と艦娘がそういう風な関係になるのは珍しいことでも

ない。一応表向きは禁止されているし、いいことだとはされませんがそういう関係は確かに存在する。『金剛』当たりは一言目には告白しているわけだし。

「ああ、そつちじゃないよ。寧ろそつち方面はここはオールオツケー。ちよつかいつていうのはつまり喧嘩売るなつてことさ」

「……喧嘩？」

「そう。絶対だめだよ？ そんなことしたら大変なことになるから、いやマジで。これはまあ私の実体験だけどさ……やつばやめようかこの話」

「ええ……。凄く気になるんだけど」

「あははー、冗談冗談。まあ可愛い後輩が同じ目に合わないように、それにここがどんなところか解りやすい話になるしね」

笑いながらも北上は変わらず歩みを止めず進んでいく。

「私がここ来たのは半年ちよつと前でさあ、まー自分でいうのも結構荒れてたんだよ。それで移転してきて最初の日に提督にすつごい罵倒食らわしたわけだよ。どうせ無能な提督なんだろうとか、なんかやらかしたからこんなところにいるんだろうとかまあそんな生意気なこと」

「……」

口に出さなかつたけれど私だつて似たようなことを思っていた。こんな辺境、文字通

りの孤島だ。普通の提督だったら配置されるはずもない。能力が低すぎるのか大きな失敗をしたのか。そんなことのせいで左遷されたのではないかと思ってるし、実際自分はそんな感じなのだから。

「というわけで着任早々思いつく限りの罵詈雑言を喰らわせたアルティメット北上様なわけだけど、それからどうなったと思う？」

「アルティメット……」

なんか凄い装飾が付いていたがとりあえず聞き流すが、どうなったのか。

「……あの提督が怒ったのかな」

「それが全然なんだよねー。あの提督全く怒らずに私の言葉ヘラヘラ受け入れてたままだったんだよ」

「……じゃあ何が」

「執務室出てから——ぬいっちに演習場に連行されて一日演習しまくってぼこぼこにされた」

「——へ？」

北上が何を言ったのか理解できなかつた。

『不知火』が『北上』をぼこぼこ？ そんな馬鹿な。

「いやー大変だったよー。まず演習場に無理矢理力づくで引きずられて、無理矢理演習

開始。模擬弾だから大破こそしなかったけど大破判定受け捲ってそれを次の日の朝まで。こっちの砲撃とか雷撃とか全く当たらなくてぬいっち無傷で、私だけ被弾しまくってで怖いなの。つーかぬいっち自体超怖い」

「つ、つまり……生意気な態度取ったら不知火に締められた？」

「そういうことだね。ちなみにその後朝になつてから提督に土下座して発言を全部撤回させられたとき。あの時も提督は笑って赦してくれてあーこの人いい人だあー思ってたよ」

「そ、それつてももしかしなくてもせんの……」

「あははー」

笑い飛ばされた。

心折った所に救いの手を差し伸べるって思い切り洗脳の手口じゃないかなと思ったけど口に出したら拙そうなので心にしまっておく。

「と、言う訳でヴェルっちも提督にケチ付けるとぬいっちにぼっこぼこにされるから気を付けてねー？ ぬいっちがしなくても私たちの誰かがすると思うけどさ」

「……そんなに提督が好きなのかい？」

「好きだよ？ 提督の為に死んでもいいくらいには」

だとしても、そうだとっても——少なくとも『北上』はそんなキャラじゃないはず。違

和感は拭えない。いや、まあ確かに『北上』だつてたくさんいるのだ。少数派でこういうのがいてもおかしくないのかもしれない。

それに、

「提督の為に死を躊躇わないのは艦娘としては当然じゃないかな」

艦娘とは兵器なのだから。平気が躊躇つていては話にならない。

けれど北上は即答だった。同時に足も止まる。いつの間にか演習場に到着していた。海に面した大きなプールというのが解りやすい説明だろう。けれど、彼女が足を止めたのはそれが理由ではなかったのかもしれない。何故かそんなことを私は思った。

「違うよ」

否定される。少しだけ振り返り、目がある。口だけは孤を描きながら。

——どうしようもなく気圧される。

「君は死ぬべきだ、でしょ？ 私たちは死にたい、だよ。どうせ死ぬなら提督の為に死にたい……ま、ぬいっちは好感度振りきれるところかメーター自体はぶつ壊れてるからもうちよつと違う答えだろうけど、私や榛名っち、加賀さんっちにずいっちはこんな感じだから、提督にちよつかいかけたらダメだよ。解った？」

「……………了解^{ダイ}」

それ以外の答えを私は持ち合わせていなかった。

この時は——まだ。

まさしく榛名は天使である

島に一つしかないという調理場は随部とこじんまりとしていた。

通常、鎮守府の食堂といえ一般の会社の社員食堂並に大きく、第一や第二とナンバリングされるぐらいに数がある。提督一人につき最大で艦娘は百人近くにもなるのだから当然だろう。朝昼晩、食事時は常に込み合い、補給艦『間宮』やパートの調理師の人たちが汗を流しながら艦娘の食事を作っていた。それでも、この島で食事を取るのには昨日来たばかりの自分を入れてもたった七人。この建物の製作者はこれをも越していたわけではないだろうが、食堂と言いつつも少し広めの一般家庭のリビングと変わらないう大きさだ。大体十人くらいが許容限界だろう。私と北上が食堂に入った時には既に他の艦娘たちと提督は食事中だった。

「やつほー、皆おはー」

「…………おはよう」

軽い仕草で手を掲げながら声を掛ける北上と帽子のつばを押さえる私に、提督や他の艦娘たちが思い思いにおはようと声を掛けてくる。机の上にはおかずの類だけが置かれたお盆が二つ、誰もいない椅子の前に置かれている。つまりアレが私や北上のもの

なのだろう。

「ほらヴェルつち、座ろーよ」

「ん」

席に着く。焼き魚に出し巻き卵、漬物に海苔が数枚。茶碗と味噌汁はまだないが、

「はい、どうぞ。北上さん、ヴェールヌイさん。御飯とお味噌汁です」

「ありがとねー」

「……ありがと」

ジャージ姿の榛名が手渡ししてくれた。白米に豆腐と葱、わかめの味噌汁。全部合わせればいかにもという純和風の朝食だった。席順は奥から不知火提督榛名私。逆側が瑞鶴加賀空席北上だ。榛名の向かいの座席には米櫃や調味料の類がまとめであった。

「これ、不知火や榛名が作ったのかい？」

「ええ、それに加賀さんですよ」

「少し野菜切ってお鍋見ていただけですけどね」

「それでも何もしてない私や北上よりマシだよ」

「あははー、それは違うよずっと。私はやろうと思えばできるよ？ このアルティ

メット北上様にできないことはないのさー」

「はいはい」

「あ、流された。ちえー」

「……」

とりあえず料理を作っているのは加賀や榛名、不知火で瑞鶴や北上はなにもしないらしい。起きた時もそんなことを言っていたし、提督の方も似たようなものなのだろう。寝起き悪いとか言っていたし。その提督は、

「……もきゆもきゆ」

「司令、口元が汚れています。ちゃんと口に運んでください」

「んー……」

寝ぼけ眼で食事を運ぶがぼろぼろとこぼしつつ隣の不知火に口を拭いてもらったりしていた。

まるで介護だ。

昨日はなんか胡散臭さ満点という感じであったが、朝の姿はなんか頼りなさ満点である。とりあえず、焼き魚を解して口に運ぶ。

「……むむ」

何の魚かは解らない。それでも驚くほど美味しかった。

それでも脂はのっているし、時間が経ったのにパサついているようなこともない。料理に関しては詳しくないが、無駄な味付けがなく素材の味が生きているというのはこれ

のようなことを言うのだろう。続けて出汁巻き卵を口に運べばこれも驚くほど美味しい。少し甘目の味付けは嫌いではないし、ふっくらとしていて食感も悪くない。

「美味しい……」

気づけば言葉を漏らしていた。

「それは良かったです！ 昨日は少し皆さんではしゃいでしまったので少し質素なメニューにしましたけど、気に入ってもらえたなら何よりでした」

「いや、ホントに美味しいね。正直驚いたよ」

「ふふーん、そりゃ榛名つちが作ってくれたんだもん、不味いわげがないよ」

「どうしてそこで貴女が威張るのかしら？」

「いーじゃんいーじゃん。ね、榛名つち」

「ええ。榛名は皆さんが喜んで頂けるの。ならそれが一番の幸せです」

「榛名つちマジ天使」

天使というの納得できてしまうくらいに晴れ晴れとした笑顔だった。ちよつと眩しいくらいに。いや確かに『榛名』が優しいのは広く知られた話だ。金剛型戦艦三番艦『榛名』。高速戦艦として実力が高く提督たちからの人気も高い。性格は極めて優しく、純粋無垢を絵に描いたように。灰汁の強い姉妹を上手く繋いでいたり、他の艦娘に対しても優しく接してくれる。

北上が言ったようにまさしく天使みたいな性格をしているのだ。

何やら得体のしれない鎮守府ではあるが、そのあたりは変わらないようだ。

ちよつと安心する。

ほつと一息付きつつ、箸を進めていたらふと疑問が湧いてきた。

「そういえばこの食材とかつてどうしてるだい？　ほとんど無人島つて何回も聞いてる

けど。昨日の夜に食べていたお菓子とかも」

口にした疑問に答えてくれたのは榛名だった。彼女はお櫃から加賀の分のおかわりの米を盛りつつ、

「お菓子や食材の一部、お米やお肉、調味料の類は月一で本土から配送されてきますよ。

家具とか生活必需品も。今月は一週間くらい先の事ですけど。後の野菜とかお魚は――

――可能な限り自分たちで賄っています」

「……え？　どういう」

「そのままの意味ですよ？　野菜はこの建物の裏に畑があつて皆で栽培しています。飲

料水は井戸があるのと川の水を蒸留したりして使つてますし、お魚に関しては、あ、ど

うぞ加賀さん」

「ありがとう。……私と瑞鶴が獲っているわ。艦載機に網を括り付けて地引網みたい

に」

「そんな艦載機の使い方は始めて聞いた……」

「ちなみに皆で栽培って言っても、基本世話してるのは榛名よ。毎日朝食後に欠かさず雑草抜きに行ったりするしね。あ、私もおかわり」

「なんというか頭が痛い。だが榛名がジャージ姿なのは納得ができた。確かにあの巫女服で畑作業というのはやりにくいだろう。」

それにしたって農作業に勤しむ高速戦艦に、艦載機で漁をする正規空母。

聞いたことがないというか聞きたくなかった。

「ふあーふおふおふおふおふえ。ふおんふあふふあいふあふあふあひふおふいつふひひはほ」

何を言っているのか全く分からない。

「北上さん、口の中の物を飲み込んでから喋ってください。行儀が悪いです……司令、お茶を」

「ああ、ありがとう」

いつの間にか提督の意識が覚醒していた。食事も一通り片付けられ、不知火からお茶を貰って一服し始めていた。

「——ごつくんとな。あー、まあ驚くよね。私も最初は驚いたよ」

「まあ、必要に応じられたんだよ。月に一回贈られてくるって言っても、生ものとかはど

うしても悪くなっちゃうからねえ。実際最初の方は何度かお腹壊したことがあるし。冷凍しようにもできる量に限りがある。だから畑作ったり、漁を始める必要があったんだ。ちなみに最近はお鶏とか飼おうか考えてるけどヴェールヌイちゃんやる？」

「遠慮しておくよ……」

「そ、気が向いたら言つてね。まあそんなわけでこの無人島鎮守府では可能な限り自給自足だよ。ちなみに電気は太陽光と風力発電。あとこの島何気に色々あるから見ておいたほうがいいよ。そのあたりは北上様ちゃんにお任せだね」

「おっけー。このアルティメット北上様に任せてよ」

「いよつ、究極ー」

「えへへー」

味噌汁を口に流し込みながら照れながらニヤニヤするという器用なのかそうでないのかよく解らないことをしていた。そんな光景を眺めながら食事を勧めていく。途中から食べ始めた自分や北上はともかく加賀や瑞鶴は未だに食事の最中、多分ご飯二杯目三杯目とかではないのだろう。正規空母なのだから食べる量は駆逐艦の数倍だ。食べるペース自体は彼女たちの方が速いのだが。

見ていたら瑞鶴が玉子焼きを白米の上に載せて適当に解し始めた。なんとなく噂に聞くTKGの一種なのかなあと見ていたら、

「加賀姉、お醤油取って」

「ん、はいどうぞ」

「ありがとう」

そんなやり取りがあった。

「……………え」

なにやらおかしいことが起きていた。

『瑞鶴』が『加賀』のことを——姉と呼んでいる。

「ん？ どうかした、ヴェールヌイ？」

「あ、いや、えっと……………」

驚いて思わずガン見していたらしく向こうから声を掛けてきた。でも、直接聞くのは躊躇われて思わず口ごもる。

「ははは、瑞鶴ちゃんと加賀さんが仲いいから驚いたんじゃない？」

「あー、確かに他じやそうかもしれないけど、私と加賀姉はすつごく仲いいから気にしないでよ。おーけい？」

「お、おーけい」

「……………珍しいのは解ってるけれど、気にしないでもらえると嬉しいわ」

「あ、はい」

さり気なく流されたと思つた上での加賀からの念押し。それでもうなにも言えなくなる。

『一航戦加賀』の五航船嫌いは有名な話ではあるが——ついさつき余計な詮索はするなとか言われたばかりでもあつたのだ。地味に正面や真横から視線を感じるので残り少なくなつていく食事に集中する。

「おかわりどうですか？ ヴェールヌイさん」

「……頂こう」

気まずさを誤魔化す為だったのかは解らないが榛名に新しい白米をよそってもらつた。実際美味しいので集中するのは簡単だった。

しばらく無言のまま過ぎて、

「……ごちそうさま」

「あたしもごちそうさん！」

「はい、お粗末様でした。お茶をどうぞ」

差し出されたお茶を受け取り一服する。ちなみに空母二人は未だに食べていた。おかず類はなくなつたがふりかけとか食べるラー油を掛けている。流石。

「んーと、じゃあヴェルっち。もう少ししたら色々案内しようと思うけど、行きたいところある？」

「えつと……」

行きたい所も何も、こっちは何かがあるのか解っていないのだが。それでも、榛名の言う畑には少し興味があつた。

「じゃあ。その畑を見てみたいかな」

「だつてさ、大丈夫榛名つち？」

「ええ、榛名は大丈夫です。折角ですから一緒に手入れもどうですか？」

「あ、私はパスで」

「邪魔にならない程度に一緒にさせてもらおうかな……あと、北上は普段なにをしてるんだい？」

「え？ 昼寝とか散歩とか昼寝とか釣りとか昼寝とか？」

「あはは、僕と同じだね」

「司令は仕事をしてください」

「……」

正直、この鎮守府で提督業とか何をするのだろうと激しく疑問だが、やはりそのあたり提督や秘書官にしか解らないことがあるのだろう。

あるはず。

あつてほしい。

それにしても、なんとというか。

やっていることが定年後に興味に走った老人のような生活だなあ、と思った。

——そしてその発想は当たらずとも遠からずだと、もう少し後に私は知ることになるのである。

やはり瑞鶴は運がいい

建物の裏にあつたのは想像したよりも随分と広い畑だった。家庭菜園のようなことを言っていたがそんなレベルではなく農家とか言われても納得できそうなくらいだ。私の想像ではプランターや小さな花壇程度だと思っていた。だが、長方形の建物の裏はほぼ全域が畑となっている。

「ず、随分と広いんだね」

「ええ、まあ。最初はもつと小さかったんですけど時間は沢山あつたので広げましたらこんな風になっていました」

まあ基本暇しているという話だし、世話をする時間も有り余っているのだろう。

「けど……畑と言ってもたくさん野菜があるわけじゃないんだね」

「まあ、まだ四月初めですから。もうそろそろ色々種とか植え始める時期なので。基本的にジャガイモとかトウモロコシとかはなるべく作ってますね、お米が無くなった時に主食代わりにもなるので。暗室にしまったり、粉すれば保存も聞きますし。と言つてもおジャガは毒になるのが怖いのですし、できることならお米も作れたらいいんですけどね……」

「……そ、そうなんだ」

正直何を言っているのかよく解らなかつた。

ジャガイモとかトウモロコシって米の代わりになったのか。

あとジャガイモが毒？

「あははー、榛名っち。そこら辺はまた今度ゆつくりお茶でもしながら話してあげれば
いいっしょー。それより今日はなにすんの？」

「あ、はい。とりあえず雑草抜きましよう。近いうちに土整えようと思ってるのでなる
べく減らしておきたいんです。……大丈夫ですか？」

「ん、他にやることもないし。雑草抜くくらいなら私だつてできるさ」

「じゃあ、軍手をどうぞ」

榛名からもらった軍手を手に嵌めながら畑に足を踏み入れる。普通の地面よりも少
しだけ柔らかい。所々が山になったり谷になっているが、山になるところに種を埋める
のだろう。しかし雑草と言ってもあまり目に付かない。日頃から榛名が手入れをして
いるのが伺えた。

いや、私自身畑知識なんてないのだけれど。

正直野菜と果物の差も曖昧だし。

「がんばってねー」

「……………何故だ」

「あははー、駄目だよヴェルっち、そんなんじや草むしりにならないよ?」

「……北上」

にへらと笑みを浮かねながら北上が横に立っていた。タンクトップの中に手を突っ込んでお腹の当たりを搔きながら、

「先っぽだけ摘んでもだめだよ。できる限り根っこに近い所持たないとき」

「……本当に?」

「ホントホント。アルティメット北上様を信じなさいって。あるいは榛名っちを見てみよう」

視線を動かしたら普通に歩くのと同じくらいのパースで中腰状態で進みながら雑草を引っっこ抜いている榛名の姿があった。

なにあれ凄い速い。

「……まー、あれくらいになるのは無理だろうけど。とりあえずやってみ?」

「……………ん」

言われた通りに草の根に近い所を掴んでみる。軍手を嵌めているから思い切つて、指が地面に触れるくらいまで下の方まで摘んでから抜いてみる。

あっさり根っこまで抜けた。

「……」

「どうよ」

抜けたのは嬉しいが北上のドヤ顔が正直イラつとした。けれどアドバイスは正しかったの、

「……ありがとう」

「いいよいいよ」

手を振りながらまた畑の外に出て、何処から持ってきたのか御座を引いて転がりだした。よくまあ仕事をしてる相手の前であんな風に寝れるのだろう。神経図太いにもほどがある。

とりあえず草むしりに集中する。北上の言葉通りに根っこに近い部分を持って引き抜けば存外簡単に抜くことができた。

しばらくぼつぼつと草むしりにを続けていた。

多分十分くらいだったと思う。

「ヴェールヌイさん、もういいですよー」

「……え、あ、そうかい」

「お疲れ様です」

「……いや、君ほどではないよ」

いつの間にか隣にいた榛名の背後にポリ袋一杯の雑草が入っていた。自分が取ったのが両の掌に乗るくらいなので榛名のスキルの高さが伺える。自分が取った分をその袋に入れて、軍手を外す。

「……………」

ふと、変な匂いがした。

「?」

軍手の先に付いた土の匂いだ。嗅ぎ慣れた海の匂いとは違うけれど、結構鼻に付く。

「これ、何の匂いだい?」

「土の匂いです?」

「あ、いや。原因はなんだろう」

「……………えっと、土の匂いは土の匂いじゃないでしょうか……………」

「そ、それでもそうだね」

「土の匂いは多分土の中に入ってる有機物とか虫の糞とかそういうのじゃないかなあ。ホラ海の匂いが死骸の匂いとか干した布団はダニの死骸の匂いとかみたいな感じで」

「そ、そこは命の匂いとかお日様の匂いと言いましょっつ」

「君はほんとフリーダムだね……………」

畑の雑草むしりを終えた後、どうしようか考えたら、

「せつかくだし加賀さんつちとずいつち艦載機漁してるだろうから見に行こうそうしよう。もしかしたらとれたての刺身とか食べられるかも」

「君欲望に素直過ぎないかな……」

そろそろ驚きを通り越して呆れてきた。恐ろしいことにこれで二日目、この先これに慣れてしまうのだろうか。そうだったら怖いのだが。

ともあれ島の見学は必要だったし、艦載機漁というのも興味があつたので付いていく。港周辺でやっているらしく、今朝と同じ道を通りながら港へ行く。演習場や艀装置の倉庫に船着き場。そして突き出した波止場の先に加賀と瑞鶴はいた。

肩に矢筒を背負い、弓を手にしていた。ついでに首から何かを掛けている。

正規空母が用いる艦載機による爆撃。基本的には鏃の部分が艦載機で、通常の弓矢と同じ手順で射った矢がある程度飛んだ後に鏃以外の部分が消失し、艦載機のみが目標へと飛ぶことで積んでいる爆弾等を落とす。艦載機は操作自体は艦娘ではなく、艦載機に

宿った妖精の類が行う。イメージ的には艦娘の下位バージョン。彼らもまた艦娘と同じで経験を積むので艦娘の練度が経駆けば高い程に命中精度等も上がっていく。

だがそれにしたって、

「爆弾の代わりに網かあ……」

ブーンというプロペラ音と共に網が空を掛けていく光景を見ると軽く眩暈がしてくる。

「おーい、加賀さんっち、ずいっちー、見学に来たよー」

「あら、さつきぶりね」

「はあーい、榛名の方はどうだった？」

「まあ、ぼちぼちだったよ」

「そつ。じゃあこつちもちゃんと見てきなさいよ。世にも珍しい艦載機漁よ」

言われなくともそのつもりだった。見れば飛んでいく艦載機は六で、横に三機、縦に二機つつ並んでいる。というかよく見ればあれ『烈風』とか『彗星一二型甲』である。激レア装備なのに。妖精さんは泣いてないのだろうか。飛び続けてしばらくしてから後ろの列の艦載機から網が切り離され、海中に落ちていく。

「落ちたわねー。んで、あのまましばらく泳がせて網の中に魚が掛かるのを待つよ」

「はあ……網を落とす位置はどうやって判断しているんだい？」

「三式水中探針儀使ってるわ」

首に掛かっているやつだった。

「それ潜水ソナーであつて魚探じゃないよね!？」

「どうかそれもレア装備!」

「え、魚とかも探知できるの……?」

「妖精さんに頼んだら案外なんとかできたわ」

「ええ……」

「なんとかなつちやうのか……」。

「でも、それって入れ食い状態になるんじゃないか……」

「それがそう簡単でもないのよねー。確かに漁取るのは簡単なのよ、私も幸運高いからその気になれば馬鹿みたいに獲れるし。というか最初の方はそうだったし」

「調子に乗って獲れるだけ獲りまくってったわね……。皆で瑞鶴持ち上げて魚パーティーなんてやったし」

「……ただやりすぎて食べられる前に腐っちゃったという」

「うわあ……」

確かに幸運艦で有名な瑞鶴が漁なんてしたら当たりしかないだろう。

翔鶴型航空母艦二番艦『瑞鶴』、何というつても幸運なのが有名だ。運といえば『雪風』

もいるが、瑞鶴の場合姉妹艦の『翔鶴』が不幸艦とか言われたりするので余計に幸運のイメージが強い。精神年齢の高い正規空母の中では比較的子供っぽいキャラクターだ。いや、駆逐艦の自分が言えることではないけれど。

ちなみに後に聞いた話ではその入れ食いの時は提督不知火榛名瑞鶴加賀の五人でパーティー並の料理を作ったにも関わらず消費しきれず、干物や燻製にしたが慣れていないせいで半分くらい腐らして畑の養分になったとか。

「どんな魚の種類が獲れるんだい？」

「基本的になんでも。よく食べるので有名なのは鯛とか平目とかかしらね。季節にもよるけれど。深海凄艦が生態系滅茶苦茶にしてれたからこのあたりでも本来ならばとれるはずのない種類も取り放題なのよ」

「……深海凄艦が出現したのが七十年前、か」

「西暦一九三九年に突如として出現、私たちが生み出される一九四五年までまでの六年間に生態系は既存のものとかけ離れてしまった……なんて、態々口に出すまでもないかしら。」

「そりゃまあ、ね」

そのあたりの知識は艦娘が生み出された時から勝手にインストールされている知識だ。当時は自分たちのような艦娘や異世界で活躍していた軍艦など存在しなかった人

類はかなり劣勢を極めていた。未知の生命体に有効な手段はなくほび全ての海は封鎖され、六年後に謎の技術にて誕生した艦娘が戦うことでようやく戦う術を見出したのだ。

意味不明なものに対しに意味不明なもので戦うというのは何とも皮肉な話だ。

艦娘としての基本知識にもオカルト技術で平行世界云々というだけで具体的な方法は残っていない。現在では資材が落ち込んだり、海で彷徨っていると場所を見つける、という具合に遭遇方法が確立されているのだが。

「それが農業や漁業に勤しむなんて……」

「彼方の敵よりも今日の食事を」

「違うねえ」

「貴女は今日の食事を取ることもしないでしょう」

なんと加賀はノリがいい

網を引きずる艦載機は大体十数分程度で戻って来た。その間適当に雑談していたわけだけれど、こんなにも速く終わるのは意外だった。網の中には陸に上がって、ビクンビクン跳ねている魚が十数匹ほど。

「魚探で魚いる所に海底近くまで直接網ぶち込むからね、ぶつちやけ時間かかるのも取りすぎ魚を海中で逃がしてる時間だしさ」

漁師さんが聞いたら怒りそうだと思うが、しかしよく考えたらこのご時世、海産物はほとんどが養殖物だった。彼女たちの行いを止めるものはいなさそうである。

「ふむ……鱒や鯛、それに名前がよく解らないけれどいつも取れるやたらグロい子……まあこんなものかしらね」

「なにその判断基準」

「魚の名前なんて回転寿司に出てくるような有名所しか知らないわ。結構種類判断できない魚が多いのよ」

「案外あたしたちがこれと違っているのと違ったりしてねー」

「無きにしも非ずね」

「いいんだそれで……」

あまりのアバウトさに呆れていたら、

「いいんだよそれで」

背後からいきなり声を掛けられた。

「ひゃあ!?!」

「おっと」

我ながら変な声を出してしまったことに恥じらいを持ちつつ、振り返れば、

「あつれ、提督じゃん」

「提督さん?」

「あら提督」

「やあ、皆の提督だよ」

ヘラヘラとした笑みを浮かべながら釣竿を肩に置き、バケツを手にした提督がいた。

「な、何をしてるんだい?」

「ん、仕事面倒になったら不知火ちゃんが珈琲淹れに行った間に抜け出してきたんだよ。ついでに榛名ちゃんに昼ご飯に手打ちうどん食べたって時間かかる料理で無茶振りして手伝いで足止めしてる」

「何をしてるんだい……」

それでいいか。というか無茶振りで手打ちうどんとか作らされている榛名が可哀想だ。

「見てよ提督さん、今日の成果」

「おお、今日も大量だねえ。流石瑞鶴ちゃん」

「えへへ、ありがとっ」

瑞鶴の頭を撫でてから、波止場の端まで行つて釣り糸を垂らす。すぐ後ろには取れたばかりの魚があるのに。思った疑問を提督も解つていたらしい。

「このあたり僕の趣味だからね。釣り糸垂らして海眺めてるだけでも暇つぶしになるさ。ヴェルちゃんもやってみる？」

「いや、私に釣りなんて……」

「無理つて言つたら無理、やろうと思つたらできるんじゃないかなあ」

「うっわなんでこのタイミングでちよつといいセリフを」

「ははは、北上様ちゃん、一々言わなくていいんだよ？」

「……じゃあ少しやつてみようかな」

提督の隣に腰かけておつかなびつくりながらも竿を受け取る。見様見真似で竿を立てる。重くはない、寧ろ軽い。けれど糸の先に水のせいとか妙な抵抗を感じる。流石に入れたばかりなのですぐには掛からない。魚自体は十分あるのだし、本当に暇つぶしなん

だなあと思う。

「ははは、皆もやってみる？」

「加賀と瑞鶴はさつき漁したばかりだし、北上がやらないだろう……」

なんて、私が言いながら振り返れば、

「ふふふ………ついにアルティメットの意味をヴェルつちに見せる時が……」

「——鎧袖一触よ」

「どこでもアウトレンジで決めてきます………！」

「なぜそんなやる気に!？」

無駄なオーラを発しながら変なポーズを取る三人がいた。いつの間にか艦装までも装備しているし。加賀や瑞鶴はともかく北上がどうするんだと思ったら連装砲を水面へと向けている。というか北上と出逢ってまだ一日目だし、そんなタイミングでアルティメットな理由なんて知りたくない。

「ふふふ………見るがいいよヴェルつち！ 本土だったら各方面にお説教間違いないこの爆雷漁法を！」

「そして私たち空母の」

「爆撃漁法もね！」

「止めよう!？」

遅かった。

「あら……?」

鼻歌まじりにうどん粉を捏ねていた榛名は遠くから衝撃に顔を上げた。

「うーん、襲撃……:はないとして、加賀さんたちが張り切っているのでしょうか。例の爆雷漁法、ただでさえ乱れてる生態系があれになるし、森の動物たちも驚くんですが——
いつものことですね」

頷きつつ、

「続きをしましょうか、不知火さん……ってあれ?」

先ほどまで一緒に粉を練っていた不知火が消えていた。

「うっわ魚臭ー」

「……やりすぎました」

「……最初の頃を思い出すわね」

「……………なにこれ酷い」

「あちゃー、しばらくここで釣りできないなあ」

視界一杯にかなりの量の魚が浮かんでいた。恐ろしく生臭いし、なによりびっくりするくらい不気味だ。ぶっちゃけ単純に気持ち悪い。

「……百くらいいるけどどうするんだ」

「一応昏倒してるだけだから放っておけば復活するだろうけど……当分魚近寄らなくなるかな」

「じゃあ放置？」

「さすがにこれらを七人で食べるのはねえ」

一人当たり多くて十五匹くらい食べなければならぬとなると勘弁してほしい。いや、空母たちならば行けるのかもしれないが、自分には絶対無理だ。あまり長くもたないだろうし。

「どうにかするとしたら干物か燻製かしら?」

「干物はともかく燻製は大変じゃない?　ぶっちゃけ作り方正しいの疑問だしさあ」

「……ちなみにどうやってるんだい?」

「穴掘って底に木辺放り込んで出た煙をあらかじめ用意しておいた迂回路で誘導して燻すのよ」

「あつてる、の……?」

「一応、食べれるけどねー。燃やした木によつては凄いことになるけど」

「凄いいことなるとはどういうことなのか絶対に聞きたくなかった。多分絶対に碌なことではない。いや、この鎮守府に来てよかったことつてなにかあっただろうか。」

「ご飯美味しいくらいしか思いつかない。」

「うーむ。仕方ない」

重苦しく提督は顎に手を当てながら、一つ頷いて、

「放っておこう——あと間違ひなく不知火ちゃんガチ説教しに来るから逃げよう」

「え」

「わー!」

「ええ!?!」

提督が一目散に駆けだして、驚いている間にも北上たちが両手を上げて叫びながら港

から走り去っていた。

とうか加賀まで。

加賀型一番艦加賀。最大量の艦載機スロットを誇る一航戦の正規空母。どこの鎮守府でも主力として扱われているし、性格は冷静沈着で極めてクール。基本的に冗談とか通じない——はずだったのだが。

両手を上げた姿勢でよく解らない半目のまま棒読みの叫びを上げながら走っていく加賀なんて見たくなかった。ノリが良すぎる。

白目剥いた魚に囲まれながら呆然としていたが、視界の向こうから物凄い勢いで走っている影があった。

不知火だ。

瞬間に距離を詰め、波止場の端にいた私の所へとたどり着く。

「……………ふうー」

周囲を見渡しながら、走った勢いで崩れていた服装を整え、

「提督はどこですか」

「え、あー……………ついさっきどこかに行ったよ?」

「ちっ」

露骨に舌打ちされたが困る。

「えっと、何をしていたとか聞かないのかい？」

「大体想像付きますので。漁をしていた瑞鶴さんと加賀さんを見学しに来た貴方達に提督がサボりに来て釣りしてたら他の三人が悪乗りしてドカン、という感じでしょう」

「……ドンピシャだよ」

「よくあることですから」

「ええ……」

ほんとの鎮守府頭おかしい。まともな所が一つも見つからない。

頭を抱えていたらいつの間にか不知火がいなかった。首を傾げながら波止場から出れば艀装置き場から現われる。

完全武装で。

「何故!？」

「制裁です」

「過激すぎないかな!？」

「北上さんたちも艀装背負ったまま逃げたんでしょう？ ならば此方も必要です」

目がマジだった。

「ちなみに提督は……」

「さて、どこに行ったのやら」

露骨にスルーされた。

「他の釣りポイントは解りやすすぎるでしょうし、鍾乳洞はこの前ノリで崩壊させ海底洞窟は罟を張ったまま反応はなし。あるとすれば森の中の小屋か湖のアヒルボートの上……あれにも乗った

ら爆散する罟仕込んで置いたのにこれも反応ない。後は建設中の鶏小屋の中？ ふむ……」

何やら物騒な言葉が聞こえたが全て聞こえないふりをした。

「困りましたね……深海凄艦が出現したらしいので対応しなければならんですが」「へえそうかい大変だねそれは」

「ええ大変です。今回は Spanien が短かったですね——」

「——は？」

聞き捨てならないことを口にした気がした。

「だから、深海凄艦です。四艦隊分出現したらしいので八丈島に駐在の提督たちでは手が足りないと連絡がありました。なので彼らの打ち漏らしを沈ませるために私たちも出ることになりました」

「なっ……」

「ああ、安心してください。出たくないなら出なくても構いませんから。ただまあ司令

を探すくらいは手伝ってくれますよね」

「……」

否とは言えなかった。

けれど体は動かずに、

『こんな所で沈むの、いやだよお……』

『司令官……どこ……？　もう声が聞こえないわ……』

『次に生まれてくる時は……平和な世界だといいな……』

思い出したくもないことを——思い出した。

つまり不知火は落ち度がない

「さて、というわけだ諸君」

窓の外は次第に暗くなっていく。沈みかける夕日の輝きを受けながら、机の前に横一列で私たちは並んでいた。右端から榛名、瑞鶴、加賀、北上様ち、そして私。不知火提督の右後ろに。普段着や寝間着ではなく艦娘としての正装だ。巫女服や弓道着、セーラー服。そして提督は常と変わら無い笑みを浮かべながら言葉をついでいく。

「昼前にいきなり三艦隊分の深海凄艦が強襲、八丈島にいた提督たちが戦ったけれどエリートやフラグシップの戦艦や空母なんかもいたから全滅させられずに撤退、戦艦夕級が一、ル級が一、空母ヲ級が二、雷巡チ級が二。合計六体でこれ全部フラグシップだつて」

「うわなにそれ頭悪い」

「全くだ。どうやら襲ってきた三艦隊分のそれぞれ旗艦と副官的なのが残ったほいね。チ級二とヲ級一、ル級は中破で、夕級ともう一隻のヲ級は小破状態。帰ってくればいいのに、そんな被害受けても元気に進行中。もうちよつとしたらあー、えつと」

「一時間もあればこの島の沖合を通過しますので進行中の連中を横からドカンするとい
うわけですね」

「超大雑把にまとめられてくれてありがとう。まあそういうことというわけで——出てくれ
る人拳手」

——は？

出てくれる人？

帽子の下で驚き目を見開く私だった。

けれど、

「榛名にお任せ下さい」

「やりますか」

「アウトレンジで決めれるといいなあ」

「ま、仕方ないよねー」

榛名たちはやる気無さげに、けれど当たり前のように手を掲げていた。

今更言うまでもなく、艦娘は深海凄艦と戦う為の存在だ。深海凄艦が海に出れば迎撃
の為に撃つことは当然あるのだから彼女たちが出撃の意思を見せたのは驚くこと
はない。けれど、問題はその前。提督が命令という形ではなく、志願を募ったこと。

——なんだそれは。

「ふむ……ちなみに不知火ちゃんは」

「言葉にする必要がありますか?」

「必要ないね。……じゃあ」

「っ」

視線を感じた。提督だけではない。榛名も、瑞鶴も、加賀も、北上も、不知火も。執務室にいる全員から等しく目を向けられている。それを私は帽子の唾で表情を隠し、自分の足元を見ることで逸らしていた。

意味があるわけじゃないのに。

誰もが手を上げた中で私の身体は動くことはなく、

「じゃあヴェールヌイちゃんは僕とお留守番で。いつも通り五人で頑張っつてね」

「なっ……っ……っ」

「了解です、では三十分後に港に集合で。お手洗い、見たいテレビ番組の予約、つまみ食い。それに死亡フラグ立てまくって逆に生存フラグ立てることも忘れずに。はい、解散」

「はーい」

不知火の言葉に榛名たちは各々の返事を返しながら、けれど私に何一つ触れることなく部屋から出ようとして――

「——待つてくれ！」

気づいたら、私はそう叫んでいた。

誰もが止まる。足を止め、動きを止め、そしてまたも視線を私に止めて。身体が震えているのを実感する。しかしそれがどんな感情によるものなのかは解らない。怒りか恐怖か戸惑いか。

「……………どうして」

多分、それら全部だ。

「どうして……………なにも言わないんだ……………！」

「じゃあ君はなにを言つてほしいんだい？」

「っ……………！」

提督の即答は刃となって胸に突き刺さった。

その痛みを感じ顔を上げることができず、それでも口は動いていた。

「……………今から出るということは夜戦になるだろう」

「そうだね」

「そうしたら……………正規空母である瑞鶴や加賀はほとんど戦えない。まともに戦えるのは

不知火や北上、榛名だけのはずだ」

「そうだね。そのあたり仕方ない」

「二回の攻撃では全て沈ませるのは難しい、反撃が来るのは間違いない。だったら、だったらどうして……私に何も言わないんだ……っ」

「だから何を言っただけのさ」

「っ……決まってるだろう！ 出撃しろとどうして言わないんだ！ 私が戦わないから!?! 最初に言った、棄て艦にでもすればいいと、なのにどうして、態々出撃を志願するような形を取るんだ！ 相手はフラグシップなんだよ!?!」

いつの間にか。

自分でも抑えきれない感情が爆発していた。けれど、私の言っていることは正しいはずだ。ただでさえ五隻しかない。その半分がまともに戦えない。戦力は半減し、深海凄艦たちが中破なり小破していたとしてもフラグシップの特に強い個体たち相手に油断できない。

だから、例え戦えないとしてもただの的として使えばいいのに。

「んー、僕棄て艦戦法しないって決めてるからねえ。ただでさえ人少ないしさ」

「そんなこと言っ……艦隊が敗北すれば、提督だって死ぬかもしれないだよ!?!」

叫び、

「いいんじゃない、それでも」

意味が解らないことを、彼は言った。

「……………はっ」

「正直、女の子戦わせるだけでも業腹なのに、皆死なせてまで生き残ろうなんて僕は生き汚くないからねえ。皆が死んだら、僕が死ぬのもしょうがない」

「なっ……………あ……………なにを……………」

提督が何を言っているのか理解できない。どうして彼は、己の死を肯定できるというのか。それも、自分たち兵器に対して。混乱する頭に、彼の背後に立つ不知火や背後の北上たちを見るが、何も言ってくれない。

「つどうして、そんなことを……………提督は、司令官は人間で……………私たちは、艦娘で、兵器で……………私たちと違って、貴方には」

「——僕は人間で君たちは艦娘で、艦娘と違って人間は替えが聞かないって？」

「つ……………そうだろう！」

艦娘とは兵器だ。兵器とは大量に作り出されなければならない。或は用途によつては変わるかもしれないが、少なくとも艦娘はそういうものだ。艦娘なんて同じ型の存在がいくらでもいる。この鎮守府では違うけれど、他のところに行けば同型の艦娘が顔を合せるなんてこと珍しくない。

例え沈んでも——誰もが帰ってくる。

実際にそうだった。

三か月前、当時所属していた艦隊にて暁、雷、電の三人は沈んだ。年始年末という一定期間の間に深海凄艦の勢いが強くなっていったのだ。度重なる出撃にて三人は沈んでしまった。別に珍しいことではない。艦娘として生まれ、第一線で戦う以上はいつか轟沈するのが運命なのだから。あの時の提督に恨んでいるわけではない。悲しくなかったわけではないけれど、これが当たり前前だ。そう言い聞かせ、ボロボロになりながら鎮守府に戻れば、

——怪我一つない暁たちが待っていた。

あの時の衝撃は今でも忘れない。呆然とする私に提督は涙を、悲しみではなく喜びの涙を浮かべて言った。

『よかったな響。ちようど、建造していたら偶然この三隻が出たんだよ。レベルを上げ直すのは大変だけど、また元通りだぞ』

元通りなわけがない。

彼女たちは自分の目の前で沈んだ。泣きながら、司令官の名を呼びながら、次の生への願いを口にしながら。海の藻屑となって消えて行った。確かに、この目で見た。

おかしい。おかしいだろう。おかしいはずだ。おかしくなきやおかしい。

新たに建造されたという暁たちを受け入れれば——一緒に戦って、沈んだ暁たちはなんだったというのか。彼女たちが存在していた意味が何一つなくなってしまう。失くしたはずのものがこんなにも簡単に帰ってくるなんて、まるで自分たちは取るに足らない石ころでしかないと言われていたような気がした。

いや、本当はそうなのだろう。実際誰もが暁たちのことを喜んでいたし、自分も喜ぶべきだった。これが艦娘というシステムの中では至極真つ当なことのはずだった。

それでも、私の心は壊れてしまった。

壊れて、怖くなって、戦えなくなった。あの時消えた姉妹たちが無意味なるのが、そして自分もそうなってしまうことが怖くてたまらなくて。

何もできなくなつて、今ここにいるのだ。

「っ……………」

思い出すだけで全身が引き裂かれそうになる。己の思考が間違いつているというのに、その想いが全てを支配しているのだ。

どうしようもなくどうしようもなくどうしようもない。

「…………ヴェールヌイちゃん」

「…………なんだい」

「君が君の心を蔑ろにしちゃあいけないよ」

「艦娘には心がない。心があるのは人間だけで、艦娘はそういう風に見えるんだけど、本当のところはそんなものない」

「……」

「実際軍学校ではそう教えられている。艦娘とは兵器であり、生き物ではない。意思疎通は可能でも感情や精神は持たず、人工知能のようなもの。心はない、心はあるのは人間だけだ。……馬鹿みたいだよねえ。いい年こいた大人が、新しい世代の子供たちにそんな風に教えてるんだぜ。……心なんて曖昧なもの、人間だって何を以てそれがあると判断しているかだつて曖昧なのにさ」

本当のところを言えば。

そう教えなければ、戦えないのだ。年端もいかぬ少女たちを戦場へ送り出すという行為は並の精神ではできない。それがただ人間の真似をしているだけの何かであると刷

り込まなければ、出撃させるなんて無理だ。慣れることはあるかもしれないが、心の磨耗は止められない。だからメディアや小学校の時期から教えている。

ああでも――。

一体誰が、今僕の目の前で瞳を溜めながら泣いている彼女に心がないなんて言うのだろうか。

そんな奴こそ、心がない。

「ねえ、ヴェールヌイちゃん」

「……」

「君がどんな風な想いをしているのか、まあ一応解るよ。少なくとも解ったつもりではいる。君の抱えているソレを、僕たちは良く知っているから。……君は、優しすぎたんだよ」

「……っ」

艦娘だからと、何もかもなかったことになるのが耐えられなかった。誰もが、当たり前だと流してしまう些細なことにまで一々心を痛めて、そのせいでどこにも行けなくなってしまう。何もできなくなってしまう。

正しいか間違っているかではえば間違っている。

強いか弱いかでえいば弱い。

だとしても、その想いは、きつと掛け替えのないものだと思う

榛名ちゃんも、瑞鶴ちゃんも、加賀さんも、北上様ちゃんも、不知火ちゃんも。

大切な人たちを無くして、その喪失をなかつたことにできなくて、ここに流れ着いたのだ。

「私と同じって言うなら……どうして……どうして、そんな風に戦いに行けるんだ」

「決まっていますよ」

半ば独り言のように零れた言葉を拾ったのは不知火ちゃんだった。僕の右後ろで、いつもと変わらずに無表情のままでヴェールヌイちゃんの疑問に答える。

「私たちだつて、本当は戦いたくない。艦娘としての使命なんて棄てて、この島で皆さんとずっと一緒にいたら日々を過ごしていたい……でも、戦わないと、この人は死んでしまいますから。それは、嫌です。だつたら、どうせ死ぬのなら。この人の為^{ため}に戦って、死にたい。私たちが戦っているから、この人が生きている、私たちの生に意味があると信じられるんです」

「でも不知火ちゃん、沈んだら沈み切る前に僕のこと道連れに殺しに来るっていつも言うよね？」

「ええ、私が死ぬときは道連れになつてもらいます。これは誰にも譲りません……嫌ですか？」

「いや全然」

「ならば問題ないですね」

「だねえ。……さて、ヴェールヌイちゃん」

掛けた声に、ビクンと肩が揺れる。そんな彼女を背後にいる皆が優しい瞳で見ていることに気付いているだろうか。ここに来た時は、皆こんな感じだった。

「君に戦えつて言わない理由は簡単だよ。言っただろう？ 人類守護とかどうでもいい。ここは戦う場所じゃない。君みたいな優しい心無くさないための場所だ。傷を舐めあつて、依存しあつて、足を引つ張りあつて、駄目になって、いい子じゃなくなつて、やるべきことをやらなくて——それでも、心を守るための場所なんだよ」

だから、戦えなんて言わない。棄て艦なんてもつての他だ。

「君の代わりなんていないんだからさ」

「——っ」

だから——、

「君も、君自身の心を守つてね」

そして誰もが帰ってくる

「では司令出撃します。帰ってきたら結婚式をお願いしますね」

「君、僕と何回結婚するつもりだい？」

「無論、輪廻の果てに辿り着くまで」

「提督、この榛名にお任せください！」

「うんうん、任せてるよ。君は僕らの良心だからねえ。帰ってきたらまた榛名ちゃんのうちで食べようね」

「提督、帰ってきたら………そうですね、愛人契約でも」

「無理にネタやらなくていいよ!？」

「しかし天井ネタはどうかと思ひ」

「提督さん提督さんちよつと聞いてよ！ 私この前テレビの抽選応募したら最新式のゲーム機当たったんだけど」

「へえ、それは凄いな。皆で遊べるといいんだけど……」

「でも敢えて受け取らないことで私は抽選で消費した運を今この瞬間に引き戻すわ！」

「うん、こんなところまで届けてくるほど暇じゃないだろうけど凄いポジティブ思考」

だからいいかな」

「あ……提督うー、正直凄いい。昼寝したい。やっぱ今日は昼寝が足りなかったよう」

「君の場合は普段が寝すぎなんだろうけど、まあそこを頑張つて、よろしく頼むよ」

「んー、もう、提督の頼みなら仕方ないなあー、えへへー」

「あはは——さて」

笑つて、水面に一列に並んだ皆を見回す。激励の言葉というにはあまりにも適当だが、うちは大体こんな感じ。変に畏まるには此処のやり方ではない。勿論、皆が望めばやってもいいのだが、今のところはこんな風でいいらしい。

僕もこの方が好きだ。

そして、言うことは一つ。

「いつてらつしやい」

「行つてきます」

告げ、応え、彼女たちは出撃する。既に太陽は沈む直前で、周囲は随分と暗い。目が悪いつもりはないが、数分眺めていればすぐに視界から消えていた。これもいつものことだけれど。艦娘の移動方法はスケートのように海面を滑っていく。原理はよく解らないが、昔軍学校で習った時は靈力が云々という奴だった。人間も察知できないわけ

はないが、残念ながらどれだけ理解しても艦娘の戦闘を助けることはできない。あることは解るのだが、ただの僕たちのようなただの人間では操作できないのだ。僕のイメージでは水のようなものに近い。

提督と言つても、実際の戦闘で役に立つことはできない。

「ま、今更かな」

自嘲気味に呟き——振り返る。

「……」

ここでは帽子の鍔を深く下ろして、顔を隠しているヴェールヌイちゃんだ。暗さと帽子のせいで口元くらいしか見えない。

先ほどから一度も口を開かずに、ただ付いてくるだけだった。彼女がどんな状態なのか、というののは考えるのも仕方ないだろう。なんとか状態とか言葉として表せられるかもしれないが——それではあまりにも冷たい。

「ねえ、ヴェールヌイちゃん」

答えはないが、構わずに港の端に腰かける。靴のつま先が水に触れる感触を得つつ、「ちよつとした昔話をしようか」

「昔頭のいい男の子がいたんだよ。それもちよつとじゃなくて、凄い賢い子でねえ。五歳になるくらいから同じ年代の子とは比べ物にならないくらいにね。十歳になる前には海軍学校の最短コースを入学して、十一の時には当時最年少で卒業していた」

私の応えも聞かずに、提督は話し始める。

のんきに聞ける余裕もないが、最短コースという言葉についての知識はあって、頭の中でそれが浮かび上がってくる。艦娘の提督になる方法はいくつかある。一般的なのは高校或は大学を卒業した後で海軍学校の提督コースに入ることだ。今いる提督の七割方はこれルートを経ている。あとの残りほぼ全て、二割九分ほどを占めるが、家族や後見人が提督業に関係を持つていて、幼い頃から提督としての技能だけを学んでいくパターン。艦娘を受け継ぐことが多いのでトップクラスの提督はコレが多い。

そして今、提督が言った最短コース。幼い年齢でも、能力さえあれば提督になるというもの。全体の一分ほどしかないが、十代前半の提督も存在するのだ。そもそも、提督といつてもその仕事は戦闘ではなく事務、そしてそれ以上に艦娘とのコミュニケーションが重要だ。故に感受性の強い子供を提督に就任させることがままあるのだ。横須賀

にもそれで提督になった十二歳の子供がいた。勿論そんなのはかなりの特例なのだが。「子供提督、なんてまあ今でも数少ないし、おまけに大体が一般への広告塔……まあ能力に関してはまちまちなんだけど、その子は実際有能だったんだよね。頭も良くてテストとかも大人顔負けでできて、何十年に一人の天才とか言われて、その子供もそれに応えようと、教えられたことを呑み込んで、実行していった」

提督の言葉だけが、夜の港に融けていく。

私はただ耳を傾けるだけで反応はせず、それでも彼は構わずに話を続けて行つた。

「実際に指揮するにあたって、まず建造したのは駆逐艦三隻。戦艦や空母幹旋してくるって話もあったけど、初めから楽するとダメだからねえ。性能が高めの艦娘を狙って建造して、後は海域から拾い上げようと考えていた。……それで実際上手くいつていたんだよ。どうやら彼は運そのものはなかったらしいから途中で新しい艦娘を拾うことはあまりなかったけど、持前の頭のよさで十分やっていけた。……そのせいで最初の三人以外使おうと思わなかったんだだけ」

子供だったんだよ、と彼は言う。

「おつむのどきが良くて、所詮子供だった。現状上手くいつているから、新しいことをする必要がない。自分の今が最善であると信じて疑わなかった。周囲も、面白がつて止めなかつたしね。それでまあ……結局その三人のうちの二人を沈めちやつたんだ」

「ツ……どう、して」

「疲労轟沈って聞いたことある？」

「……何度も出撃を重ねた艦娘が、目に見えない疲労が積み重なっていくことで無傷でも呆気なく轟沈してしまうこと」

「そう。考えてみれば、たった三人だけで出撃し続けて行けばそうなるのも当然だった。それでも、最年少提督だから結果を求められたし、少年も応えようとした。一緒に戦うはずだった女の子の負担にも気づかずに」

自嘲気味の言葉と、己への失笑を私は聞いた。

いつの間にか私は提督の背中を見ていたが、彼の顔は見えない。

「まあ……結果的に見ればよくある話さ。新任提督が調子に乗って艦娘を轟沈させる。大体の提督は経験するよね。問題だったのは少年は新米の上に子供で、その上で弱虫だったってこと。自分の失敗が認められなくて、受け入れられなくて——挫折しちゃったんだよ」

「そして……此処に流れ着いたという訳かい」

「ご明察。まあ僕の昔話さ」

「……だから、なんだっていうのさ」

先ほどの話と一緒に。結局、私や他の皆のように艦娘やそれに関わる人間からすれば

よくあることで、気にするほうがおかしいのだ。

「まあ別に大した意味はないけど、これでも慰めているつもりなだけどねえ」

「……慰めて、どうなるっていうんだ」

「さあ？」

「さあ、つて……」

「僕は君に戦えなんて言わない。今話したみたいに僕も、僕たちも同じだからね。命令も強制も指示も指令も絶対にしらない。これから先毎日深海凄艦がこの島を襲ったとしても僕は何も言わない。いいかい、ヴェルちゃん」

呼びかけられ、

「僕たちは間違っているんだろう。強いか弱いかと言えば弱いし、恰好いいか恰好悪いかと言えば恰好悪い、凄く凄くないというのでも全然凄くないし、良いか悪いかでいえば悪いし、プラスかマイナスでいえばマイナスなんだろう。僕たちの存在が愛すべき国民の皆さんに知られれば怒られるんだろうね、だらけていないで戦えつてさ。それを忘れちゃあいけない。そこだけはき違えちゃあいけないんだ」

「だったら……どうして司令官は、そんな間違った場所で間違つたままでいるんだ」

「間違つてもいい、そう思っているからさ」

「……どうして」

「強くかつこよく凄く良くプラスで正しいことで——蔑ろにされるものがあるから。それは君だつて解るよね」

脳裏に過るのは暁たちの散り際それがなかったことになってしまった再会。

そしてさつき聞いた提督の話。

人と艦娘——心。

「単純に感傷なんだよ。こんな世界で、一か所くらい泣きべそかいてもいいよな場所があればいいと思ったんだ。大切な人の喪失に涙を流せる優しい娘がいる限り、その心を守りたかったから。提督なんていつでも、できることはあまりにも少ないんだ」

「——」

「話がズレちゃったなあ。僕は皆帰ってくるまで、ここでぼうつとしてるつもりだけど、冷えるかもしれないし戻っても……」

「ねえ、司令官」

「……なんだい？」

ゆつくりと足は進んでいく。一步踏み出すたびに身体は揺れる、それでも司令官に並んだ。

「もし私が、今から出撃するっていたらどうする？」

「止めないけど、どういふつもりか聞かぬ。義務感とかなら止めるけど」

「……皆、この道を通ってきたんだらう？」

「そうだね。不知火ちゃんも榛名ちゃんも加賀さんも瑞鶴ちゃんも北上様ちゃんも、皆同じように戸惑って、困って、迷ってた」

「だったら——私は彼女たちと一緒にいるよ。まだ彼女たちのようになれないけど、いつか心から、彼女たちの喪失を悼めることができる心を手に入れるまで」

納得できたわけではない。

今は、まだ。

多分、もつと時間は掛かるだろう。

でもいつまでも泣いていては、皆に申し訳ないから。

「私はヴェールヌイ。信頼と不死鳥の名を持つ艦娘だ。そして——不死鳥は何度だって蘇るものだよ」



「……やれやれ、思いのほか強かだねえ」

立ち直ったというわけではないが、意識のベクトルは前に向いているのだろう。最短記録かもしれない。地味に鬱状態が長かったのは榛名ちゃん、三か月くらいは沈んだままだったし瑞鶴ちゃんと加賀さんは最初は心配だったけれど、対立する余裕もなく、二週間くらいで気づいたら仲良くなっていた。

北上さまちゃんは初日に挨拶したら次の日ボロボロになつて土下座してきたのはノーカンだが。彼女が今のようになったのも二週間くらい。

「元々ヴェールヌイっていう艦娘自体精神年齢高いから……というのは無粋かな」
彼女自身を選ぼうとして前に進んだのだから。

まあ、二日目からイベント盛りだくさんだったせいもあるかもしれないが。

僕自身、随分と語ってしまった。

「ちよつとだけ、言わなかったこともあるけど」

言わなかったこと——かつて僕が二人の駆逐艦を沈めてしまった時のことは意図的に省いていた。これは榛名ちゃんたちも知らないことで、当事者である僕と、そして不知火ちゃんしか知らない。

ずっと昔、二人を——陽炎ちゃんと黒潮ちゃんを沈めてしまった時のこと。

失つて、悲しんで、でも誰にも怒られなかった僕は、感情を吐きだされることを求めた。失敗し、失わせたのだから怒られるべきだと思つた。けれどその喪失は当たり前前

ことでしかなく、当たり前のように流され、結局馬鹿なことに不知火ちゃんへと感情を向けたのだ。

どうして怒らないのか。

どうして泣かないのか。

どうして責めないのか。

貴方は悪くない。

艦娘だから仕方ない。

これが仕事。

最初は不知火ちゃんもそう言っていた。

でも納得がいかなくて、何度も何度も問い詰めて――、

『悲しいですよ、私も』

言った。

『でも、仕方がないじゃないですか。そういうものなんです、私たちは泣いてはいけません。それが艦娘なんです。陽炎や黒潮が死んでしまったのは悲しいですよ。泣きたいですよ。今すぐ声を上げて、何かも忘れるくらいに。でも駄目なんです。やってはならないんです。私たちは兵器だから、私たちに――心がないから』

いつもと同じ無表情だった。

でも、その時の僕にはどうして泣いているようにしか見えなかった。そして、泣きたいときに泣けることができないのが許せなかった。当時所属していた鎮守府から離れようとした時は同僚や家族からも当然引き留められた。でも、強引に離れ、この島に行きついたので。

「我ながら若かったねえ」

彼女たちの分まで戦うべきだったのだろう。

本当は、そうするのが正しいのだ。そうするべきだった。そうしなければならぬと誰もが心がけているはずだ。

「今更過ぎるなあ」

苦笑する。

そのあたりの思考はどうしたって僕が悪いことに行きつくんだから。

「僕が悪い——だから彼女たちは悪くない」

少なくとも僕には何もできないのだから。

こうして、港の端っこに座って待つことくらいしかできない。戦闘そのものには心配していない。ヴェルちゃんも練度は高いし、不知火ちゃんたちに至っては全員が上限とされる九十九を超えている。

だからまあ、別に執務室でもいいのだけれど、こういうのは気分の問題だ。

帰ってきた皆を、できるだけ早く迎えてあげたいのだから。抱きしめたり、頭を撫でたり、下らないことを言ったりして。

彼女たちの心の居場所になるために。また戦おうとか、どこか遠い所に行こうなんて思っていない。どこにもいなくていい、ここに帰って来てくれれば。

泣けるだけ泣いて、いつか皆で思いつきり笑えることを信じているから。

「だから僕は待っている」

——そして誰もが帰ってくる。



「おかえり」

「ただいま」

こうして提督は決意する

不知火ですが、最近の司令の様子がおかしいです。

先週くらい前、珍しく司令部から連絡が来てかららしくもなく悩んでいることが多い。

いや、怠けていたり、呆けていたりするのはいつものことなのだが、それでも悩む、というのは滅多にない、或は私たち艦娘にその姿を見せるようなことがないのだ。不知火たちの前では常に飄々とし、自然体でいる、そういう風に心がけ、実践している。

馬鹿な——馬鹿な人なのだ。

いや、知恵や知識という点に関しては右に出る人はいない。少なくとも自分が建造されてから、関わった人間の中ではそうだ。彼は掛け値なしに天才と呼ばれる者だ。かつて陽炎や黒潮を疲労轟沈させたということはあるが、経験不足というよりも周囲の大人たちがそういう風に仕向けていたというのが大きかった。多分、将来有望な年若い提督に轟沈という経緯を積みせよとか、そんなことだったのだろう。

今更言っても仕方ないけれど。

そんな司令は普段からサボりがちではあるが、事務能力という点では決して低くな

い。というか自分や加賀さんにそのあたりのことを教えたのも司令だし、瑞鶴さんや加賀さんの漁、榛名さんの農業に触れさせたのも司令だ。北上さんは……まああの人は仕事をしないのが仕事のようなものだ。偶に大きな魚を釣り上げたり、森から猪とか採ってくるし。

だが、そんな司令が最近単純に宙を眺めたり、釣り糸も垂らさずに海を眺めている。話掛けても反応が鈍い時も多い。

「というわけで急遽艦娘会議です。最近司令がおかしい原因を考えましょう」

「おぉー」

「ありがとうございます、加賀さん」

気の抜けた加賀さんの合いの手に感謝しつつ、部屋の中を見渡す。

既に一日は終わり、夕食は風呂も終えて後は寝るだけ。六人部屋に布団も敷いて、夜のガールズトークの時間である。寝間着袴の加賀さんと瑞鶴さん、パジャマ姿の榛名さんとヴェルさん、北上さんは相変わらずのタンクトップの上からジャージを羽織っている。季節はもう十月なので、それなりに肌寒い。

「でも提督の様子かー。言われてみれば確かに最近ちよつとあれだよなー」

「確かに、榛名も少し変に思っていた所です」

「んー、そうねえ。ぼーつとしてること多いわよね」

「この頃私がネタ振りしても反応してくれないものね……これは一大事よ」

六人で円を作りながら、真ん中に並べたお菓子をつまみなが四人も頷く。

やはり自分だけの気のせいではなかったらしい。まあ自分が彼について言ったことが勘違いや間違いがあるとは思っていないから、これはあくまで確認だったのだが。

「ヴェルさんはどうですか？」

「ん」

一人発言していなかったヴェルさんに話を振る。

気づけば彼女がここの鎮守府に来てから半年くらいたった。二日目のまさかの装備無しで前線に突っ込んで回避に専念せざるを得なかったという珍事件を繰り広げた彼女だったが、それ以降は随分と安定した。三か月前に起きた深海凄艦の大発生の時も、前線であまりにも手が足らず緊急的に——最新式テレビや家具等を引換に——赴いた時も自分の役目をまっとうし、戦い抜いていた。

そんな彼女は水色のパジャマ姿で、自家製のポテトチップスをつまみながら、

「そうだね、私もおかしいとは思っていたよ。ただ、別に調子が悪いとか困っているとか、そんな感じじゃなさそうだから特に何言わなかったけれど」

「そこです」

ビシリッ、とヴェルさんに指を指す。

その通りだ。

確かに呆けたり、ぼんやりしているが、決してネガティブなものではない。

「悩んでいるけれど、決して悪い方向性ではない……一体、どういうことでしょうか。ここ最近は出撃もなく、実に平和だったはずですが」

「ヴェルつちの畜産もそこそこ上手くいつて、鶏の卵とか毎日取れてるしねえ。畑や漁の方も順調だし、森の動物が暴れたとかそんな話もない。今日も鎮守府は平和だと思うけどねえ」

「基本何もしないアンタが威張らないでよ。まあ、その通りだけどさ。加賀姉はなんかない？」

「ない、わねえ。少なくとも、島や私たち自体にはあまり大きな変化はないはずだけど」

「……と、いうことは、提督自身に何かあるということでしょうか？」

「やはりそういうことですか」

自家製のティラミスのスプーンで掬いながら頷く。何気にあの司令は甘いものが好きなので、色々試した結果ティラミスが一番受けた。毎回それなりの量を作って、パツド一枚分平らげてしまう。今食べているのは自分たちように別に作っていたもので、彼に食べさせるより前に味見はしていたが、やっぱりいい味だ。

「……正直、私としては不知火が解らないというなら、誰にも解らないと思うけれど」

「……おだててもこのティラミスくらいしかできませんよ?」

「褒めてない、あ、でもティラミスは貰う。いや、そうじゃなくて、司令官と一緒にいる時間が一番長いのは君だろう? その君が解らないのなら、もう本人に聞くしかないんじゃないかな」

「ふむ……」

ティラミスを渡しながら、言われたことを頭の中で咀嚼する。

確かに、自分と司令の付き合いは長い。時間的にもそうだし、このメンツの中でもそううだ。理解し、されているという点では誰にも負けない自負はある。いや、こういうのは勝ち負けの問題ではないだろうけど。

「どう思われますか?」

他の四人に話を振るが、

「まあヴェルつちの言う通りだよねー」

「ええ、榛名もそう思います」

「提督さんといえばやっぱ不知火だしねえ」

「そうね、私もそう思うわ」

四人が四人とも同じような答えだった。

「ふむ」

では、仕方がない。

こうしてお喋りしていても楽しいガールズトークなだけで、司令の悩みの答えは得られないだろう。

「では、今から司令の部屋に行ってきます」

「お、夜這い？」

それは司令の反応次第だ。

立ち上がって、皆に軽く手を振ってから出て行こうとし、

「ちよつと待った」

ヴェルさんに止められる

「なんですか」

「なんですかじゃなくて、その恰好のまま行くのはどうかと思うのだけれど」

「？」

言われ、自分の姿を見下ろす。

「はあ——司令のワイシャツと下着だけです何か」

大体毎日洗濯物からちよろまかしている司令のブカブカワイシャツ。

不知火の寝間着は常にこれだ。

「せめて下くらい着ようよー！」

「夜ですよヴェルさん、お静かに」

「誰のせいだと……!」



「どうしようかなあ……」

手の中で小さな箱を遊ばせながら、僕はしみじみと呟いた。

それは、少し前で大本部から送られてきたものだ。

残念ながらこんな無人島に住んでいるせいで、社会情勢からは取り残されているが、世の中は少しづつ変化していくものらしい。一体どんな風に思ったのかは知らないが、こんなものを一部の提督に配布しているのだから。

「三か月前の戦いで前線で軽く無双しちゃった時のせいかなあ……今思えばなんか適当なことを言った気がするし」

限界練度九十九。それを突破した不知火ちゃんたち。ヴェールヌイちゃんもまた、毎

日彼女たちにしごかれることですぐにその限界を超えていた。

境界線は——彼女たちを人として扱うかどうか。

兵器として扱えば、あくまでも規定内の画一した能力しか発揮できない。けれど、そうではなく、一人の人間として扱った時、彼女たちは艦娘としての限界を超えられる。

積み重ねられた想いは、無駄じゃあない。

そんなことを、適当に言いふらしたのだ。

どうやらそれが受け入れられたらしく、艦娘に対する風潮が変わっている——というのはこれを貰った時に一緒に知った話。

なんというか、複雑だ。

喜ぶべきだけれど、同時にどうにも言葉にできない。

「……まったく、どうしようもないねえ僕も」

苦笑する。

迷っているのは手の中の箱をどうするか。

渡すか渡さないかではない。

——渡してもいいのかわろっか。

「……どうだろうねえ」

呟いたのと同時に扉が叩かれ、音が響いた。

少し驚きながら視線を向ければ、

「不知火です。少しお聞きしたいことがあるのですが、よろしいですか？」

「え、あ、ちよつと待って」

部屋の中を見回す。別に散らかっているわけではない。僕自身はかなり適当だし、散らかすのは得意だが毎日朝に不知火ちゃんが整理や掃除をしていてくれたりするから片付いてはいる。普通のフロアリングの床に机、ベッド、それに壁一面の本棚。大体がミステリーや推理か学術書。特に変なものはない。

この間は一秒となく、

「ん、いいよしらぬい——」

「失礼します」

答え切る前に扉が開いた。

扉の外の声で解っていたことだが、我が秘書艦の不知火ちゃんだ。もう十時過ぎで、寝る直前だったらしく、普段短めのポニーテールで括っている髪は下ろされている。寝間着は少し大きい、ブカブカのワイシャツ——アレが僕のものであることはスルーしている——だけの裸ワイシャツという色々理性を削ってくる恰好だ。

ともあれノータイムは酷い。

「ホントに失礼だね!？」 思春期の子供の部屋に乱入するお母さんみたいなことやめてよ

！」

「何か不都合でも？ それに——ダメと言われても入るので関係ないですね」

「なにそれひどい」

相変わらずセメントである。

「それで、こんな時間にどうしたのかな？ 夜這い？」

「別にそうなくても構いませんが」

「もうちよつと照れようよ」

「生娘でもあるまいし、というか手を出す本人に言われたくないです。そういえばヴェールさんにも手を出したそうですね、流石です……いえ、そうではなく聞きたいことが一つ」

「微妙に貶されたのか褒められたのが解らないけど……何かな？」

床に座り込み、ベッドに背中を預けながら問いかける。

気づかれないように小箱は隠しながら

「最近司令の様子がおかしかつたのでそれについて——あと後ろに隠したそれについて」

「目ざとすぎる……！」

秘書艦が有能すぎて辛いとは如何に。

適当にあつちやこつちキヨロキヨロするが、不知火ちゃんが正面に正座して直視しているので視線が突き刺さっている。

というか普通にパンツが見えている。何気に可愛いピンクい奴。わざとだろうなあ。理性へのダメージが酷い。

結構シリアスな思考をしていたのに。

「あー……」

赤くなつていそうな顔を隠そうと帽子の鍔を下ろそうとして、空振りする。

当たり前だが消灯前で、僕だつて部屋着だ。帽子なんて被っていない

「……」

「……」

微妙な沈黙が流れ、

「あー、不知火ちゃん」

「はい」

「僕と結婚しない?」

「はい——はい?」

率直に言いすぎて、目を白黒させてしまったことを申し訳なく思いつつ、言葉が続けた。

「いやなんか色々社会感覚変わったらしくて、人間と艦娘の間の結婚が有りになったんだよ。と言つても法的なものじゃないから仮扱いなんだけどき。でも、鎮守府内では普通の婚姻関係を結べるようになったんだよ。それでまあ、この頃ずっと悩んでたわけけど……やっぱりに渡すなら君しかないしね」

「……」

頬を掻きながら苦笑する。

榛名ちゃんや加賀さん、瑞鶴ちゃん、北上様ちゃん、ヴェルちゃん。他の五人のことも勿論大好きだけれど。

それでも、結婚というのなら。人生の墓場と呼ばれるその相手を選ぶとしたら。

やっぱり、不知火ちゃんしかないのだ。

「……迷っていたのは」

ポツリと、不知火ちゃんが言葉を漏らした。

表情は変えないまま、目を伏せている。

「誰に渡すか、ということですか？」

「まさか。この話が来た時から渡すのは君しかないと思っていたよ」

「……不知火が受け入れないでも？」

「それも、違うかな」

自惚れとは思わない。

彼女ならば、僕が申し込めば、間違いなく受け入れてくれただろう。まあ考えないでもなかったけれど。

問題は、別のことだ。

「では」

言葉を続けるのに、彼女は一度息を整えることを必要とし、

「――陽炎や黒潮のことですか？」

「……そうだね」

今でも思い出す。

常に笑みを絶やさず、天真爛漫なムードメーカーだった陽炎ちゃん。

そんな陽炎ちゃんの能天気さや不知火ちゃん無自覚セメントボケに突っ込みに苦勞していた黒潮ちゃん。

かつて共に戦い――僕の無知が殺してしまった少女たち。

忘れられない。

忘れるわけがない。

一生、僕は彼女たちのことを忘れない。

「なんとなく、さ。申し訳なくなつたというか……結婚とか、そんな呑気なこと言つても

いいのかなあとか、そんなことを思っていたわけだよ。渡すかどうかでも、誰に渡すかでもなく、渡してもいいかって迷ってたんだよ」

「しかし……答えは出たんですか？」

「どうだろうねえ」

再び苦笑する。

普段ヘラヘラとした笑みを浮かべている自覚はあるが、今は意識しなくても勝手に頬は緩んでいた。

「ホントは君が訪ねてくる直前も悩んでいたんだよ。でも、なんか、ね。君の顔見て、直球で聞かれたら……なんか言っちゃてたよ。まあそれに、陽炎ちゃんがいたら僕の葛藤とか笑い飛ばしながらバシンバシン背中を叩いていただろうし、黒潮ちゃんがいたらため息吐きながら馬鹿にされていただろうさ」

「……そうですね、そういう子たちでした」

僕はへらへらと笑みを浮かべたままに頷き、不知火ちゃんもまた小さく頷く。

「じゃあ、答えを聞こうかなあ」

笑みを、消した。

ぶつちやけ真面目な顔とか何時振りか解らないけれど、それでもこんな時くらいは普通の顔でいたい。

いや、まあへらへらした顔つきは生まれつきなので変えられない気がするのだが。

とにかく可能な限り真面目顔をして、隠していた指輪の入った箱を彼女へと差し出し、

「僕と結婚してくれるかな？」

「——不知火は兵器よ？」

「——あの日から僕は君を兵器として見たことなんかないよ」

「——人間の女の子じゃなくて艦娘よ」

「——僕にとつて君はセメントだけれど心優しい女の子だよ」

「——少なくとも、社会的に見たら変態よ」

「——君に言われるのなら、ご褒美だね」

「——自分が死ぬときは貴方も道連れにしようとしている酷い女よ？」

「——それを望んでいる僕も酷い男だからお相手だね？」

「——今の話を聞いた時、自分が選ばれなかったらどうしようとか考えたわよ？」

「——僕だつて拒否されたらどうしようとか考えたよ？」

「——こんなこといって貴方から言葉を引き出している面倒臭い女よ？」

「——男の甲斐性の見せ所だねえ」

「——司令官は、不知火でいいのかしら」

「——君がいいんだよ」

「そう」

前に出ながら、不知火ちゃんが倒れ込む。

軽く両腕を広げていた彼女を、そのまま僕が受け入れ、

「じゃあ——いいわ」

ニツコリと笑みを浮かべた不知火ちゃんを抱きしめる。

兵器なんかではない、柔らかい感触。

そして、唇を重ねて、

「幸せにして」

「勿論」

海の光は全て命 Life of the warsh

ip girls

やつと大鳳は疲れを取る

荒れ狂う海と嵐の中、砲火の残滓と血風が吹き抜けて行く。

スタビライザー
調整機器が最早機能は怪しく、自分自身の経験とバランス感覚で海上を駆け抜け、電探の類は既に中破状態故に広い範囲での索敵はできない。単純な性能に關しては人間をも逸脱しているはずだが、嵐と夜のせいで普通の人間程度にしか感覚が使えていなかった。ただの服に見えて靈的な装甲である装束も人間サイズに作り替えられた主砲や艦載機の発射台も大破していて、もうまともに動かないだろう。

「つ……ハアーツハアーツ」

実際、私は動ける気がしなかった。

装甲空母大鳳。最新の技術を駆使され艦娘であり、空母としても耐久が比較的硬いこの身でも最早いつ轟沈してもおかしくなかった。手にしているクロスボウはもう柄の部分しか残っていないから使い物にならない。

そしてそれは私だけではなく、

「皆さん……被害、は」

首と耳に取り付けられた無線に話しかける。幾度かのノイズの後、

『……木曾だ、武装は尽くイカれた。後は切先の折れた剣だけだな。隣の武蔵も無線も壊れ、主砲も残らず焼き付いててる』

『時雨だよ。夕立も僕も似たようなものだね。特に僕の右脚の艤装が完全に使えなくて、一人で立つのも難しい』

『ハチで、す。さっきので魚雷を使い切りました。水着もポロポロです』

同じ艦隊の仲間である『木曾』『時雨』『伊8』、それに無線の不調らしい『武蔵』と『夕立』。聞こえてきた声はノイズ混じりだが疲労の色が濃く、内容も悲惨なものだ。まず間違はなく全員が大破、あるいは轟沈寸前と行ったところだろう。これ以上は砲撃一発だつてできはしない。

満身創痍。

でも、

「この戦い……私たちの勝利です」

——海の藻屑と消えていく深海の怨念たちへと私は告げた。

或は己に言い聞かせるように。

誇張抜きで決戦だった。持ちうる弾薬燃料装備艦装。それらを最善の状況にして挑み、それでも尚一筋縄では行かなかつた化け物は純白の海姫だった。

飛行場姫。

高い戦闘能力とある程度の知性を持つ人型の深海棲艦の中でも比較的最近発見された『姫』。白い体に体に纏う滑走路めいた生々しい艦装。名前の通り飛行場がそのまま人間としての形を得たような相手だった。

それこそがこのアイアンボトムサウンドの女王であり、その栄華も今が終わりだった。艦装や装甲の代償に完全に停止した姫は海の中に消えて行く。取り巻きにいた戦艦たちももう残骸だけ。

自分たちもいつ沈んでもおかしくない状態だが、それでも沈んだのは彼女たちだ。

先に沈んだ方が——負け。

『……………う……………ちか……………』

インカムから酷いノイズが響いた。だが無線の相手が操作をしているらしく、少しずつクリアになって行った。

『大鳳！ 応答しろ！ こちら提督！ 第一艦隊応答しろ！ 木曾、武蔵、時雨、夕立、ハチ！』

焦るような、恐れるような、色々混じった大声で叫ぶ私たちの司令官だ。

「こちら、大鳳聞こえています提督」

『っ！ ようやく通じたか！』

「すいま、せん。嵐が酷くて遠距離の無線が不調でした。報告もまともにできず……」

『いや、構わん。それで……どうだ？』

「はい」

一つ頷いてから息を吸う。

この瞬間は何時だつて気持ちがいい。姫を倒したせいかな嵐が収まり厚い雲の切れ間から太陽の光が指す。他の仲間たちも目視で確認しながら私は提督に告げた。

「作戦完了、第一艦隊これより鎮守府へと帰投します！」

？ ●

ある一定の時期、期間、地域に深海棲艦が大量発生することが儘ある。

それは放っておけば人類の勢力範囲が大きく変わってしまいかねない勢いでだ。原則的に深海棲艦が出没する海には一定のパターンがあり、大量発生時にもそれは変わらない。ただ単に短いスパンに数多く、さらに特別強力な深海棲艦がそれらの海を統べている。そんな状況陥った場合、早急に大本営から一部の提督が選別され、海域の近くに

仮説本部を設置し対処に当たる。

だからこそこういう類の海は俗にE海域と呼称されていた。

『Emergency』や『Enemy』、さらに成果を挙げた提督には特別な報酬が与えられたり、海域の奥で新種の艦娘が発見されることが多いために、『Event』という意味などを込められてそう呼ばれている。

正直なところ、私は最後のイベントという意味合いは好きではなかった。多分、他の仲間たちもそう思っていることだろう。

イベントだなんて、そんな楽しいものではない。

たくさん死んで、たくさん殺される。

ただそれだけのよくある戦場だ。

艦娘だからそこにいるのは当たり前なのだけけれど。

「……でも、これで終わりね」

「ああ、終わったな」

天井を見上げながらポツリと漏らした私の言葉に反応は武蔵さんだった。普段は短めの白髪を二つにくくっているが、ドック、つまりお風呂の中なのでそれらは湯に濡れ流されている。起伏のはっきりとした体つきと褐色の肌は同性の私から見ても艶かしい。胸の谷間溜まるお湯なんか特に。

別に羨ましいわけではない。

仮にも空母でありながら駆逐艦や某RJな軽空母のごとくにまな板な胸部である私だが羨ましくなんか、ない。

湯船に預けていた体を会話のために持ち上げる。未だに重い疲労が残っているが、これでも大分回復した方だ。そして武蔵さんの周囲にはさらに私の仲間であるもう四人が体を癒していた。

「ふう……」

口元までしつかりと湯に浸かる木曾さん。

「あー、まだ辛いつぽいー」

縁に体を預け、脱力している夕立さん。

「ここから、あまり力を抜きすぎると溺れるよ?」

そんな夕立さんの気を使っている時雨さん。

「……」

そして言葉を発さず、態々防水加工をして持ち込んだ本のページを噛み締めるようにハチさん。

共にE海域を制覇した戦友たち。

基本的にドッグというのは提督一人につき最大でも四人分しかない。一つの艦隊が

全員入渠するということはまずなかったが、今回に限り、海域突破の報酬として六人分のドッグが解放されていた。正直なところ全員が全員とも轟沈間際だったのでありがたい話だった。艦娘として今の私の練度は既に上限である99で、他の五人もそれに近いがこうして六人一緒に入渠したのは始めて。

普段ならばそれなりにはしゃいで水の掛け合いくらいしそうだが、今のところはそんな余裕がないのが残念だけれど。

「今回は、八回行きましたっけ」

「ああ。そのうち二回は有効打を与えられず、一回は敗退。四回目からようやくダメージを与え、八回目でようやく打倒……いやはや、我らのことながらよくやったよ」

「ですわね……」

記憶を掘り返して嘆息しながら同意する。

基本的に『姫』と称される深海棲艦は異常なまでに強い。通常の深海棲艦の何倍もの戦闘力を持ち、耐久力も同様。一度の交戦で倒し切れるものではないし、高い自己修復能力すらもある。

まんま反則級の相手だ。

いやよく勝ったなと思う。

それが私たちのやるべきことなのだけれど。

「この海域も長かったですね」

「かれこれ三週間か。一体どれだけ沈んだんだろうな」

「……考えても仕方ないことです」

「……そうだな」

少し嫌な気分になる。普段は努めて考えないようにしていることだったが、大きな戦いの後だから若干感傷的になっていたらしい。しかし戦いは終わったのだ。しばらくすればまたE海域は発生するだろうし、鎮守府に戻ってもまた深海棲艦たちとの戦いは変わりがない。

それでも区切りは区切り。

そう信じ、私は再び湯船に体を沈める。

今頃、提督はなにをやっているのかしら。



「……もう一度、言ってもらえますか？」

声の震えを理解しながらも俺はそれを止めることはできなかつた。

E海域に近い港に作られた仮設鎮守府、その最も地位の高い元帥閣下の部屋だ。三週間前に作られた急ごしらえということで執務机とエアコン以外大したものはいないが、これはどこの提督の私室も似たようなものだ。そしてそれらは視界に入れず、執務机についた元帥閣下に視線を向ける。

一体どんな視線だったのかは解らない。

「……もう一度言おう」

巖のように鍛えられた体を提督指定の白メインの軍服に押し込んだ元帥は感情を押し殺したように繰り返す。この元帥のことはそれなりに知っているが、しかしこうやって言葉を発するのは初めて見る、

「アイアンボトムのその先に——新たな海があった」

「——」

海の向こうにまた海がある。

それは当然のこと。世界中の海は繋がっているし、それぞれに地域毎の名前があるわけだが、元帥閣下が言う場合意味合いが異なる。

つまり——まだいるのだ。

深海棲艦。

海に揺蕩う怨念。

何一つ解っていない人類の天敵たちが。

戦いは、終わっていない。

驚愕を押し殺すのは無理があつた。

自分だつて提督としてかなりの経験を積んでいる。二十代後半ながらも第一艦隊の平均練度が九十を超えているのがその証。E海域が想定よりも広かつたというのも前例がなかつたというわけでもない。十分に想定できることだつた。

それでも驚愕は隠せなかつた。

それくらいに今回のE海域は修羅場だつたのだ。

投入された艦娘と提督はほとんどが高い練度を誇るそれぞれの第一艦隊の精鋭たち。そんな艦娘たちが一体何人海に沈んでいったことだろう。高練度艦娘の育成の時間と手間を考えるとそれは馬鹿にならない。実際俺の第一艦隊にしたつて木曾夕立時雨の三人は提督に着任してからの長い付き合いであり、比較的最近発見されたもう三人はあの程度艦娘に付いての知識を得て効率的に育ててきた結果だ。三人とも性能が高かつたが故にかなりのスピードで今の様な形になつたが、普通はこうはいかない。

もつと言えば高練度の艦娘と使える提督は別である。

どうするか、というのはこの場合愚問である。

「他の提督たちにはこの場合は」

「まだだ。だがすぐに発表する。君に教えたのは、君が先の戦いにおける功労者であること、我々の中でも最大クラスの戦力保有者であること。この二つだ」

つまりそれは、

「私に矢面に立つて戦えということですか」

「そうだ。……拒否権はあるぞ？　君の代わりがないこともない」

「やります」

即答だ。それ以外にない。この身は提督なのだ。驚きもした、動揺もした。だが、深
海凄艦がいるというのならば艦娘を引きつれ戦うだけだ。

「現在私の第一艦隊は入渠中ですが、終わり次第作戦会議を開きます。新海域に付いて
情報があればお教えください」

「……解った」

その時——なぜ元帥閣下が悲しそうな目をしながら頷いたのは解らなかつた。

それでも武蔵は受け入れる

「……静かだな」

夜の海を見渡しながら沈黙が鬱陶しくなつて私は言葉をついた。

意外なほど波が穏やかな海は不自然に静かだ。少し前からこのあたりの海に入つて来たが、気持ち悪いくらいの静けさが海原を支配されている。

静かというか、張りつめている。

嫌な汗を、掻く。

「確かにちよつと不気味っぽい」

「敵影未だに無し。索敵機からの反応も無いですね」

陣形としては真つ直ぐ、単縦陣。旗艦の大鳳を前にして、私、夕立、時雨、ハチ、木曾。いつも通り、といえぱいつも通り。

艦娘としては当たり前だが、艦娘は海の上を滑る。艦娘はそもそも海を歩くことができるし、足に艀装のスタビライザを活用すれば時速数十ノットで海上を航行できる。最も速度に関しては艦娘の種類によって様々で、この面子に関しては私とハチが低速、他

の四人が高速で、彼女達が自分とハチに合わせてもらっている。

まあハチなんかは水の中に潜っているわけだから、気分としては私だけにあわされている感じだ。

低速なのは艦隊の中で最も重装備だからなのだが。

「——アイアンボトムサウンド、か」

鉄底海峡——それがソロモン海、サーモン諸島近海における異名だった。

艦娘とは異世界の軍艦の精霊が人間としての形を取った——らしい。

らしい、というのには艦娘たちの誰もがそのあたりの実感がないからだ。別にそれぞれ皆で頭を突き合わせて真面目に話し合ったことはないが、互いのなんとなく察し合っている。鎮守府で建造されたり、海で彷徨っているところを拾われる時にあるのは、異世界とやらにおける自分たちの軍歴と深海凄艦に対する基本的な知識だけだ。

そこからくみ取れるこの辺りの海域の知識はあまりいいものではない。

第一次、第二次ソロモン海戦。

自分たちのオリジナルが作られ、戦った世界ではそう呼ばれた海戦があつた。『戦艦武蔵』が深く関わっていた戦いではないが詳細は詳しくない。

詳しいのは、夕立だろう。

真後ろにいる彼女のオリジナルこそがその戦いにて戦果を上げた軍艦だったのだから

ら。戦って、戦い抜いて——沈んだのだから。

色々思う所は——ない。

あつてはいけない。

自分たちは艦娘であり、艦娘は兵器なのだから。

物思いうる兵器なんて笑えない。

だからそう。折角終わったと思っていた戦いがまだ続いてしまった、それが辛いなんて、考えては行けないのだ。

そんな、ことを考えていて、

「——敵艦隊発見！」

「！」

旗艦の大鳳が叫んだ。声は続いていき、

「泊地凄姫一、浮遊要塞三、駆逐口級フラグシップ三！」

大鳳が先行して飛ばしていた索敵機から情報を口にしていく。真後ろにいる自分は肉声そのまま聞こえるが、それより後ろの仲間たちには首の無線を通して全員に繋がっている。

「泊地凄姫だど？ また随分な大物が……ッ」

深海凄艦の中でも目撃情報の少ない『姫』クラスの化物だ。完全な人型に背中に背

負った長大な砲身。見た目のカラーリング以外は艦娘と何も変わらない。さらに口のついた球状の浮遊要塞を数多く従えている。

驚く暇もなく、すぐに肉眼で深海凄艦が肉眼で確認できた。夜だから索敵範囲がかなり下がっているのだ。そもそも空母は夜の海で戦うことはない。それでも大鳳が艦隊を率いているのは彼女が自分たちの中で最高練度であることと、昼戦に移行した時の為だった。

「敵艦隊見ゆ！」



『これより戦闘に移行します！』

「了解。何かあり次第順次報告しろ」

鎮守府の司令室にて大鳳からの通信に応えた俺は静かに息を呑んでいた。新しい海域に於ける最初の戦闘、それも出てきたのは泊地凄姫だ。大鳳たちが練度平均九十を超えているとはいえ不安は残っている。

それでも艦娘と深海凄艦の戦いに俺たち提督は関わることはできない。息を長く吐き、呼吸を整える。ここまで来てしまえば自分は進退の指示しかできないのだ。

「大丈夫か」

「ええ、問題ありません」

司令室にあるのは空調と無線機、それが置かれた机に幾つかの椅子。そしているのは俺と、元帥閣下の二人だ。本来ならば出撃中の提督の部屋にそれ以外の人間がいることはない。それでも今のように新しく発見された深海凄艦の出没海域等に初めて進む場合などは元帥クラスの者が一緒にいることが稀にある。

今回がこれだ。

多分、落ち着かないのは元帥と一緒にいるからというのも少なからずあるのだろう。時代錯誤にもほぼ自分の執務室から出る時には常に軍刀を佩いているのだから落ち着けという方が無理だ。

「繰り返しになるが、今回は威力偵察だ。無理して深く進むことはない」

「は、」

それは解っている。

けれど簡単に引き返すつもりもなかった。新海域というのは危険が大きいのは当たり前だがそれ以上に旨みも大きい。新種の艦娘が見つかることは多いし、新しい深海凄

艦の発見による情報、またそこから発展される新装備、攻略による勲章。それらは提督の業績としては大きい。これまで俺自身そういう手の報酬は何度も得ているからこそ、よく解っている。

「……大佐、君はこうして提督をやっても何年になる？」

「はっ、軍学校を卒業してから今八年になります！」

唐突な質問だったが相手は上官である。質問されたことにも、質問の内容も内心眉を潜めつつ、反射的に返答した。

八年。

この俺が提督として艦娘を率い、深海凄艦との戦いが始めてそれだけの年月が経っていた。別段長い期間ではない。そもそも既に六十年以上人類と深海凄艦の戦いの歴史は続いているのだ。流石に当時の現役提督は前線に出ていないが、四半世紀でも戦い続けているような超熟練提督だって存在するのだ。保有艦娘の殆どが練度カンストしているという話だってよく聞く。

そういう人に限って前線を引退しているのだから、俺にはよく解らないのだが。

執務室で座っていることしかできないのだから年なんて関係ないだろう。

いずれにせよ八年というのは提督としては決して長い年月ではない。子供提督なんてマスコットは例外にしても大体の提督は軍学校を卒業してから提督になる。それで

大体は二十歳前後。自分はそこから八年提督して生きているわけだが、同期の中でも自分以上に高い平均練度はいないはず。自分でいうのもなんだがエリートと呼ばれる提督の一人なのだ。

「そうか。スマンな、変なことを聞いて」

「はっ、問題ありません」

まあそういうしかないが意味不明だと思う。

いまいちよく解らない人だ。この元帥にしたって確か未だに四十代なのに元帥となつていながら尋常ではない提督のはずなのだ。なのに艦娘を従えているところを見たことがない。精々妻らしき女性くらいだ。

妙齢のいつも日傘を指す如何にも大和撫子な人だったと思い起こして、

『被害報告！』

「！」

無線機から悲鳴に近い大鳳の声が届いた。

こういう時、何が起きたかは大体決まっている。

『空中要塞、駆逐口級は轟沈させましたが、泊地凄姫が中破。また武蔵さんと木曾さんが中破状態です！』

「…………ツ」

撃ち漏らし。それほど珍しいことではない。敵艦がダメージを追っている場合、大きく迂回してやり過ごすのが基本だ。しかし今回は面倒だ。泊地凄姫という姫クラスは中破でも当然のように戦闘する。退くにしたり進むにしたり、姫相手ではリスクが大きい。

しかしどつちにしてもリスクが大きいのだ。

「大鳳、そのまま泊地凄姫を倒しきって——」

「待て」

「……はっ。なんででしょうか」

「撤退しろ」

「——」

短く、拒否を許さない命令だった。

「武蔵と木曾改二は絶対数の少ない艦娘だ。それも高練度になると万が一の場合失うわけにはいかない。ここは撤退だ、大佐」

「……しかし、撤退と言われますと」

命令そのものに、異議はあまりない。元帥の言葉も最もだからだ。戦艦武蔵を保有する提督は少ない。練度九十超えなど極稀だろう。木曾自体は比較的数量が多いが、改二になると一気に数は減る。だから元帥の判断に逆らうつもりはないが、問題はできるかど

うかだ。

基本的に、撤退はそれほど難しくはない。適当に砲撃でもばら撒きながら全力で後退するだけなのだから。だがしかし当然ながら場合よっては艦娘の被害が大きく、自力で逃げるのが困難であったり、敵の方が逃がしてくれないということがままある。

今回がまさにそれだ。相手は泊地凄姫。中破状態だからといって、動きが損なわれるものでもない。寧ろ深海凄艦は傷を負ってから活発化することすらあるのだ。

その場合どうするか。

答えは—— 囿を用いること。

戦闘中の海域から少し外れた所に複数の艦隊を待機させておいて、撃ち漏らしの気を逸らして撤退や進撃の補佐をするのだ。無論、危険は大きく殆どの艦娘はその時点で轟沈する。基本的に練度の低い駆逐艦で行われているやり方だ。

今回に関してその囿艦隊がどういう風に配置されているか、俺はまだ知らなかった。本来ならば通知があるはずなのに、元帥から気にせず出撃しろと言われてたから。

俺の疑問を、元帥も察しただろう。

深く頷き、

「安心しろ。今回は俺の伝手で助っ人を呼んでいる。そいつらが大佐の艦隊を回収する手筈だ」

「——助っ人」

「囿ではなく——助っ人？」



「まだだ、まだこの程度で武蔵は沈まんぞ……ッ」

「ちよつとぼかし、涼しくなったもんだぜ」

「強がらないでください！ 提督から撤退命令が来ました！」

「!!」

服や艀装を破損させた私や木曾の顔に浮かんだのは驚きと、それに怒りと悔しさ。泊地凄姫相手の撤退命令。それが表わすのは自分たちを逃がすために囿となる艦娘が来るということだ。これまでの海域でもそうだった。私たちが華々しい戦果を挙げる裏には多くの艦娘が犠牲になっている。

できることなら、やりたくない。

それも言っていられないけど

「■■■■ーッッ!!」

「ほんと、しつこいつばい!」

「夕立、焦らない!」

「魚雷、行きます!」

視界の先では声にならない絶叫を上げながら砲身を振り回す泊地凄姫と、それを相手をする夕立たち。砲撃も魚雷も、もう何度も当たっているのに未だ沈むことはない。

本当に、悪夢みたいだ。

そんな下らない感傷染みたことを思った瞬間だった。

それは、来た。

「――」

何かが自分たちの横を高速で通り抜けた。夜の大気を貫くそれは、私や木曾、大鳳を一瞬で追い抜き、前方で戦う夕立たちすらも超えて――泊地凄姫の肩に突き刺さった。

直後、爆発。

「■■■■ーッッ!!!」

「な……!?!」

泊地凄姫が絶叫するが、驚きは同じだ。一体どうすればあんなことができるのか。

答えは、でない。

けれど手掛かりは背後に。

「――ふむ」

「囚艦隊、だつたはずだ。」

彼女たちは私たちを逃がすために捨石になるためにここに訪れた艦娘だつたはずだ。

なのに、彼女たちは違つた。何が違うのかは解らず、もう少し後になつて知ることとなり、この時感じた違和感是他の皆も感じていたことをこれもまた後に知ることになるのだが。

ともあれ、その六人はいた。

駆逐艦不知火。戦艦榛名。正規空母加賀。正規空母瑞鶴。重雷装巡洋艦北上。駆逐

艦ヴェールヌイ。

彼女たちは、現われた。

旗艦らしき不知火は手袋を嵌め直しながら、

「行きましょうか」

まるで少し買物へ行くくらいの気軽さで、泊地凄姫へと真正面から突つ込んだ。

なぜか木曾は笑われる

「やあやあ皆さんどうもこんにちは初めまして。今日から皆さんのサポートを務めさせていただきますのでどうぞよろしく」

糸目の青年は二十人近い提督に囲まれながら、へらへらと笑いながらそんな風に挨拶をした。

青年、或は少年とすら言ってもいい年頃だろう。多分二十前後だ。大体平均年齢が三十程度の今の基地に於いては異色な年代だろう。

いや異色なのは年代ではなく、その立場とキャラクター性なのだが。

そもそもが軍人らしくない。一応白い軍服は着崩すことなく着ているが、どういうわけかやたら似合っていない。軍服に着せられているとかそういう感じではなくて、軍人という枠そのものに違和感が生じている。幾つかの勲章もあるが、それすら似合っていない。勲章というアイテムに対して本来あるはずの敬意が微塵もないからだろうか。ちゃんと定石通りに、隙なく並べている様は興味がなからこそその結果に思えてしょうがない。体つきはとりあえず最低限には鍛えておこうと言わんばかりに軍人としては妙に華奢だ。

なにより、へらへらと貼り付けたような笑みが異常なまでに胡散臭い。
しかしサポート。

訳が分からない。

訳が分からないものに——俺の艦隊は昨夜は救われた。

その場にいる全員が同じように思い、次に口を開いたのは元帥閣下だった。すり鉢状の会議室の最下層の少年の隣の元帥殿は全員を見まわしながら言う。

「言つた通り、昨夜付けで今海域攻略の補佐として彼に着任してもらつたことなつた。基本的には通常出撃は行わずに撤退補助を専門とするということ覚えておいてくれ。撤退時にプロセスは手持ちの資料を参照してほしい。何か質問はある者はいるか？」

「はいはい」

元帥の問いかけは目前の提督たちに対してのものだったはずだが、あろうことか手を上げたのは隣の少年であつた。周囲の空気に一切頓着せず、笑みを張り付けたまま緩く手を掲げて、

「昨日の夜に来て、それでまあいきなり出撃つてことで基地の案内とかまだなんですけど、そこら辺どうなってますか？」

「この後に誰かに担当をさせよう。他にあるかね？」

「ふむ……食堂のおすすすめは？」

「俺はカツカレーだが」

「なるほど」

なにがなるほど、だ。

「待つてください元帥閣下！」

立ち上がるとともに声を上げたのは俺より少し年上の提督だった。彼は信じられないものを見るかのような視線を少年に送っているが、それは彼だけではなく俺も含めて全員共通の感情だったはずだ。

「サポート専門とはどういうわけですか！」

「おやおや、貴方は目と耳が付いてないんですか？ 今元帥閣下殿が言ったように撤退時の補佐で、ついでに手も使えないようだから教えておきますけど、その手元の資料をめくると詳しいことが書いてありますよ。おやめくられている？ なるほど文字が読めないようですね」

口を開いて飛び出して来た皮肉にまた目を見開いていることを自覚する。言われた方もまさかそんな答えが帰ってくるとは思ってもよらなかったからか、数度口をパクパクさせて、

「なんだその態度は！ 貴様はそれでも軍人か！」

「はて、丁寧に教えたつもりだったんですけど？ ついでに言えばこれでも僕は軍人で

す」

一応、とか、多分、とか。そんな言葉が語尾に付きそうな言い方だ。

自分の立場も、相手の立場も一切興味がないとしか思えないし、実際そうなのだろう。全身からそういう雰囲気を出している。隣に最も肩書きが高い元帥がいるのにも関わらず。

しかし同時に思うことは、

「元帥閣下！ どういうつもりですかこんな子供を！」

「何か問題でもあるかね？」

「ないと思いますか！」

若干悲鳴染みた言葉だったが無理もないだろう。現在今のこの泊地は緊張に包まれている。やつとのもので海域を全制覇したと思ったらその先がまだあり、待ち構えている深海凄艦だつてやはり姫や鬼クラスがうようよいる。そりゃあ神経だつて参るだろう。

そこにこの少年と来れば、悲鳴だつて上げたくなる。

「問題があるかどうかは俺が決めることだ」

なのに、一切構わず元帥は言い切る。

「現状、彼の力は必要だ。これまでの海域で多くの艦娘を失っている。我々はこれ以上

の被害を出すべきではない。故に彼と彼の艦娘の力がある。言っておくがこれは決定事項であり、覆ることはない」

言い切る——というより切り捨てている。

バツサリと、発現をした提督だけではなく、他の者の意見も聞くことは無く、この件は終わったことだと切つて、捨てて、終わらせていた。

まるで、腰に佩いた無骨の軍刀を振りぬいたかのように。

誰もが、そんな彼にたじろぎ、

「あ、一つ皆さんに良いことを教えましょう」

少年だけは一切頓着せずに右手の人差し指を立てた。

「皆さんどうも僕のことや気が入らないようですが、撤退時のみのサポートなんですから、皆さんが軍人の威光を見せつけて自分たちの仕事を果たして深海凄艦を倒しまくってくれればいいんですよ。貴方たちは勲章を貰えて、僕は楽ができてウインウインですわね」

へらへらと——笑う。

この部屋に入って来てから一切変わっていない顔のまま彼はふざけたことを言う。文句があるなら自分の仕事をしろ。

後始末なんてさせるな。

つまりはそういうことだ。

笑みの下に、正体不明の嫌悪感染みたものがある。

糸目の奥の瞳に、考えるのも恐ろしい感情が秘められている。

「……他にあるかね?」

改めて、元帥が言う。

誰も手を上げなかった。

聞きたいことはあつただろうが——それよりも、これ以上目の前の少年に関わりたくないという気持ちが勝つたのだろう。

けど、どうしても、気になったことが一つだけ。

だから、俺だけが手を上げた。

「なんだね?」

「一つ彼に質問が」

「どうぞ?」

どうして。

「どうして——通常出撃をしないんだ?」

あんなに——あんなにも彼の艦隊は強いのに。

問いかけに、彼は答えなかった。

答えずに、少しだけ目を開けるだけ。
真つ暗な深海みたいな色の目だった、と思う。



「……………」

入渠を終えた俺は、新しいマントと眼帯、制服を貰い着替えてから重い足取りで散歩をしていた。

別に普段からそれが趣味というわけではない。ただ、昨日起きることがあまりにもシヨツキングで整理が必要だったのだ。

記憶の、知識の整理。

心の整理——は、まるで人間みたいだなと自嘲する。

天気は悪くない。むしろ、深海凄艦の影響で曇りや雨が続いていた最近からすれば大分良い方だ。気温は心地よいものだし、風も適度に吹いている。まだ入渠している武蔵は仕方ないとして、既に艦娘用の宿舎にいる大鳳たちも一緒に散歩をしようかなと思っ

ていたら、

「ふわあ……あー……いい天気だねえ」

道の脇の木の上からそんな声が聞こえた。

視線を上げればそこにいたのは北上だった。でも、泊地内で見るとは北上とは大きく違う。緑や白の制服ではなくて、何故か大き目のタンクトップにジャージの上下だった。

直感的に——直感なんてもものが艦娘に存在するかは置いておいて——昨夜、自分たちの応援に来た六人の一人だと理解する。

「ふわあ……って、ありや？ 木曾じゃん、どうしたの？」

「いや……お前こそどうしたんだ」

木曾、正確には『木曾改二』。

軽巡洋艦球磨型五番艦『木曾』、それが二度の改造によって雷巡へと進化したのが自分だ。木曾という艦娘自体は別段珍しい物ではないが、自分のように雷巡まで進化した艦は珍しい。雷巡といえば目の前の『北上』や『大井』が今でも代名詞なわけだし。

「見りゃ解るでしょ？ 昼寝だよ昼寝、いやあ天気がいいねえ今日は。昼寝には持つて来いだ」

「呑気なもんだな」

「だって私の仕事は撤退のお助けだしねえ。今出撃してる艦娘がいらないなら、仕事もな

いわけだし。おっと、こういう言い方をするとまるで私が仕事がある時はちゃんと仕事をしているみたいじゃないか」

「いや……仕事があるならしろよ」

「めんどろだよねえ」

ふざけている。

ふざけているが——昨夜はこのふざけた連中にふざけた戦いで救われたのだ。

基本的に艦隊戦闘というものは予め決められた編成、隊列を維持しながら砲撃をしたり、魚雷を発射しあうことで行われる。艦装の射程はかなり長いので、特に接触する必要もないし、接触すれば接触するだけ轟沈の危険性が高まる。だからこそ砲を行う艦隊は、気を引きつける為に大きく接近するから轟沈しやすいのだ。自分を含めて、近接武器を装備している艦娘もいることはいるが、最後の手段とでもいうべきか、実際に使うことはまずない。

なのに——昨夜の彼女たちは違った。

まず不知火とヴェールヌイが飛び込んだ。

買い物に行くような気安さで前進し、当然のように砲火に晒されたが問題はそこから。

不知火はまるですり抜けるように——というか、実際に自分たちには砲撃が不知火を

すり抜けたようにしか見えず。

ヴェールヌイはまるで踊るようにリズムを刻みながら回転と曲線運動と共に海を駆け。

瑞鶴と加賀は矢を艦載機に変換することなく深海凄艦を射抜き。

榛名も普通に砲撃はせず、近づいで打撃と組み合わせ。

そして北上は、

「魚雷を、ダーツみたいに——」

「ん？ まあ一度水に落とすのもいいけど、慣れると投げつけた方が楽なんだよこれが」

「……」

意味が解らない。

艦娘の戦い方じゃない。六人が六人とも艦娘としてのセオリーから外れている。異常な回避力を見せた駆逐艦の片割れの不知火に至っては砲撃すらしていない。

撤退の補佐でありながら泊地凄姫を沈めた最後の一撃は——あろうことか背後から首をへし折るといったものだった。完全に気配を消し、電探にもかからず凄姫の背後に忍び寄った彼女は左腕で身体を固定し、右手で顎を掴んでから思い切り回して首をねじ切ったのだ。

そんなの、どんな艦娘だつてできない。

練度がほとんどカンストしかけている自分たちでさえ。

考えれば考えるほど、胸の中に言いようのできない違和感が生まれる。

解らない。

解らない。

解らなくて——怖いのだ。

それは、なぜか、触れてはいけけないものではないかと思ってしまう。

けれど、口は勝手に動いていた。

「どうして——あんなことができるんだ」

そして隻眼に映った北上はくすりと笑った。

少しだけ孤を描いた笑みに、どうしようもなく気圧される。

「どうしてできないの?」

そう、北上は言っ

「可哀そうだなあ」

と、続けた。